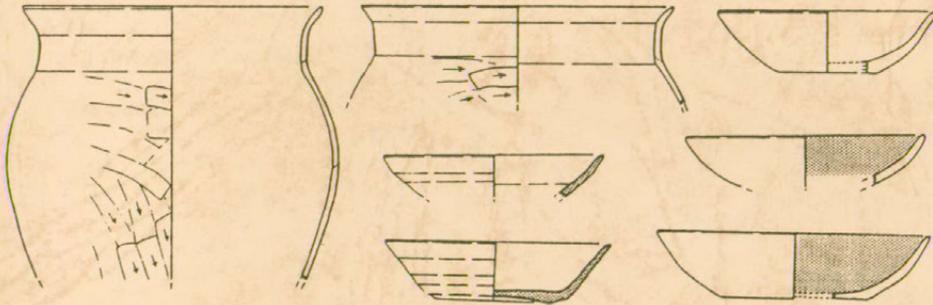


戌久保遺跡

町横尾遺跡

——長野県埴科郡坂城町宅地造成事業に係る緊急発掘調査報告書——



1998. 3

坂城町土地開発公社

坂城町教育委員会

戌久保遺跡

町横尾遺跡

1998. 3

坂城町土地開発公社

坂城町教育委員会

序

坂城町教育委員会教育長 大橋 幸文

戌久保遺跡と町横尾遺跡の坂城町埋蔵文化財調査報告書が完成しました。

戌久保遺跡は調査範囲が限られていましたが、古墳時代後期から平安時代にかけての、この地域の歴史を知る小さな手がかりが得られたように思います。

昭和43年から44年にかけて町営住宅の戌久保団地が造成されたときには、埋文調査はなされませんでした。いま自治区としての戌久保区に発展していますが、区が立地している大地に先人の歩みが眠っていることの片鱗をうかがうことができます。

町横尾遺跡は平安時代から中世末におよぶ住居址であることに特色があります。坂城町における埋文調査では、古代から中世の住居址の発掘例は少ないので、この遺跡は古代住居址の変遷と、集落の様相を知る上で貴重です。

この遺跡に隣接して観音坂城跡が存在していると考えられます。観音坂城跡は、明治11年の南条村誌に略絵画が示されており、広大な館跡だったことが想像され、今後の調査が待たれます。

戌久保遺跡の調査も町横尾遺跡の調査も、ともに限られた調査期間と人員で献身的に取り組んでいただきました。調査に関係した皆さんに心から感謝申し上げます。

例 言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町戌久保遺跡、町横尾遺跡の発掘調査の報告書の合冊本である。
- 2 発掘調査は、坂城町土地開発公社より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査所在地及び面積

戌久保遺跡	長野県埴科郡坂城町大字坂城8948-1他	126m ²
町横尾遺跡	長野県埴科郡坂城町大字南条4782他	1391m ²
- 4 調査期間

戌久保遺跡	(現地調査) 平成4年1月8日～1月22日
	(整理調査) 平成10年1月8日～3月27日
町横尾遺跡	(現地調査) 平成9年11月22日～12月17日
	(整理調査) 平成10年1月8日～3月27日
- 5 本書の執筆・編集は、助川が行った。
- 6 町横尾遺跡の地理的環境については、戌久保遺跡の地理的環境と重複する記載が多いため、割愛した。

- 7 本書の作成にあたり助川のほか萩野、宮尾、塩野入、天田、塚田が主な作業を行った。
- 8 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 9 本調査及び本書作成にあたって、下記の方や機関からご配意を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略、50音順)

青木一男、青木正洋、赤松 茂、上原 学、臼田武正、尾見智志、川上 元、児玉卓文、小林真寿、小山岳夫、佐藤信之、坂井美嗣、新谷和孝、須藤隆司、堤 隆、羽毛田卓也、林 幸彦、福島邦男、藤沢孝広、三石宗一、翠川泰弘、宮下健司、矢口忠良、矢島宏雄、和根崎 剛、(社)更埴地域シルバー人材センター

凡 例

- 1 遺構の略号は、下記のとおりである。
H→竪穴住居址 D→土坑址 F→掘立柱建物址 P→ピット M→溝状遺構
- 2 遺構名は時代別ではなく、発掘調査時における命名順である。
- 3 挿図の縮尺は、下記を基本としたが、縮尺の異なるものもあるため、各図ごとに縮尺を明記した。
竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑址・溝状遺構→1/80 カマド→1/40
遺構配置図→1/400 土器→1/4
- 4 挿図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。
 - 1) 遺構
遺構構築土→斜線 カマド→網点(太) 焼土→網点(細)
 - 2) 遺物
須恵器土器断面→網点 土師器黒色処理→網点
- 5 遺物の挿図中での表記は、第1図1は、1-1とした。
- 6 土層の色調は、『新版 標準土色帖』の表記に基づいて記載した。

目次

序・例言・凡例

第I章 戌久保遺跡

第1節 発掘調査の経緯	1	2 掘立柱建物址	24
1 発掘調査に至る動機と経緯	1	3 竪穴状遺構	26
2 調査の構成	2	4 溝状遺構	28
3 調査日誌	3	5 土坑址	28
第2節 遺跡の立地と環境	3	6 特殊遺構	32
1 地理的環境	3	7 その他	34
2 歴史的環境	4	第5節 総括	35
第3節 調査の概要	6	写真図版	36
1 調査の方法	6	あとがき	
2 基本層序	7	抄録	
第4節 調査の結果	8		
1 土坑址	8		
2 ピット	9		
3 遺構外出土遺物	9		
第5節 総括	10		
写真図版	11		

第II章 町横尾遺跡

第1節 発掘調査の経緯	12
1 発掘調査に至る動機と経緯	12
2 調査の構成	13
3 調査日誌	14
第2節 遺跡の立地と環境	14
1 歴史的環境	14
第3節 調査の概要	17
1 調査の方法	17
2 基本層序	17
第4節 調査の結果	20
1 竪穴住居址	20

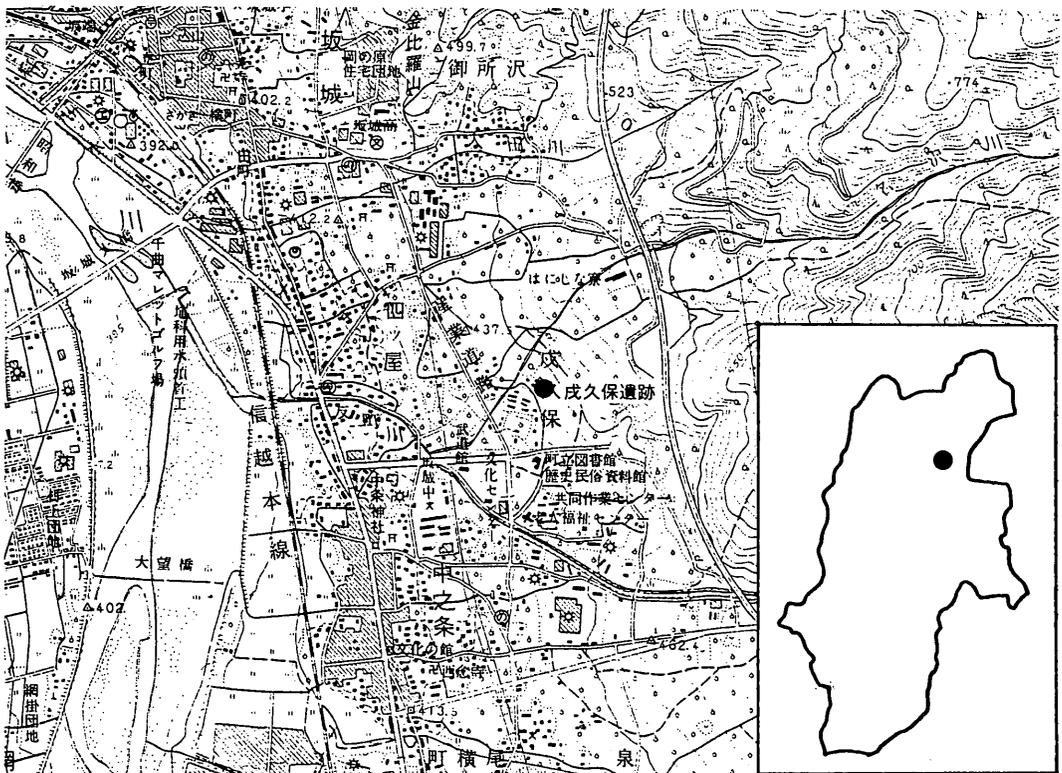
第 I 章 戊久保遺跡

第 1 節 発掘調査の経緯

1 発掘調査に至る動機と経緯

戊久保遺跡は、坂城町坂城に所在し、標高440m前後を測る名沢川によって形成された扇状地扇中央部に位置する。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、古墳～平安時代の集落址とされ、坂城町誌では11世紀に属すると思われる採集遺物が掲載されてはいるが詳細な遺跡の性格は、不明瞭な状態であった。

今回、坂城町土地開発公社が行う宅地造成事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされることとなり、長野県教育委員会文化課、坂城町土地開発公社、地元研究者の森嶋稔氏、坂城町教育委員会社会教育課の4者による保護協議の結果、開発対象地の遺跡の状況確認のため、平成3年9月17日～22日に試掘調査を実施した。この結果、遺跡が希薄な状態であったため、再度の保護協議の結果、道路建設部分のみを対象にした発掘調査を行う運びとなった。



第 1 図 戊久保遺跡位置図

2 調査の構成

平成3年度発掘調査体制

(調査団)

団 長 森嶋 稔 (日本考古学協会、千曲川水系古代文化研究所主幹)

平成8年6月16日逝去

担 当 者 助川 朋広 (坂城町教育委員会学芸員)

調査協力者 池田 輝昭、伊藤 篤、島谷 久、富山 儀昭、中島 勘三、古畑 真一、
矢島 岩太郎 (以上、更埴地域シルバー人材センター)

(事務局)

教育長 島田 雅男

社会教育課長 塩野入 猛 社会教育係長 宮下 和久

社会教育係 竹内 剛、竹内 禎夫、助川 朋広、北沢 明

平成9年度 整理調査体制

調査指導者 塩入 秀敏 (上田女子短期大学教授、日本考古学協会)

調査担当者 助川 朋広 (前 出)

調査補助員 塩野入 早苗、萩野 れい子、宮尾 美代子 (以上、町臨時職員)

(事務局)

教育長 大橋 幸文

生涯学習課長 赤池 利博 文化財係長 池田 美智康

文化財係 助川 朋広、小平 光一

塚田 千代 (町臨時職員)

3 調査日誌

(平成3年度 現地調査)

- 1月8日 バックホーによる表土剥ぎを行う。 1月17日 P8の調査を終了する。
1月10日 A地区の検出作業を行う。 1月20日 B区の検出作業を行う。
1月13日 A地区の遺構調査を開始。 1月22日 本日をもって、現地調査終了。
1月14日 P8内から土師器甕が出土する。

(平成9年度整理調査)

- 1月8日 土器洗いを開始する。 1月22日～3月27日 図面の修正・トレス等
1月14日 土器の注記・接合を開始する。 行い報告書の刊行。

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

坂城町は、北信濃と東信濃の接点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置している。県の東部から北流する千曲川によって右岸地域と左岸地域とに分断されている。この千曲川は、坂城広谷と呼ばれる沖積地を形成し、町の中央部を流れ、戸倉、上山田の沖積地へと続いて行くのである。

坂城町は、南では、両岩鼻が千曲川断層面の岩壁となり、東では、太郎山、鏡台山などの山稜が、上田・真田・更埴の市町村界となり、北では五里ヶ峰から葛尾山、横吹きと自在山の岩壁がネック状となり、屏風のように連なっている。西では、大林山を主峰とする山稜が連続し、上田・上山田・坂井との市町村界となって、一地域を構成している。地理的構造は、右岸地域と左岸地域では様相が異なり、左岸地域の村上地域は千曲川断層面の切り立った岩壁と小さな沢や岩錐による小複合扇状地と千曲川沿いの沖積地に構成されている。

千曲川右岸に位置する坂城・中之条・南条地区は摺り鉢状の盆地形をなす千曲川の独立した空間で、広谷状をなし、西南する広い斜面と、いくつかの小河川や沢によって形成された複合扇状地と千曲川沿いの沖積地となっている。

戌久保遺跡は、坂城地区の名沢川によって形成された標高440mを測る扇状地の扇中央部に位置している。この付近は、坂城町の果樹栽培を代表するりんご・ぶどうの中心地である。

2 歴史的環境

坂城町の自然堤防や小河川によって形成された複合扇状地には、いくつもの遺跡が存在し、遺跡の性格も多種多様である。ここでは、遺跡の所在する坂城地区を中心とした歴史的環境を時代ごとに見ていく事とする。

縄文時代では、早期の込山B遺跡(30-2)などがあり、楕円押型文などが施された土器が採集されている。前期では、込山A・B(30-1・2)遺跡から諸磯系土器様式の土器が、採集されている。中期では、込山A遺跡(30-1)から加曾利E式の土器が採集されている。晩期では、込山E遺跡(30-5)から、遮光器土偶の頭部が採集されている。

弥生時代後期後半の箱清水式土器が出土した和平B遺跡は、標高約1000mに所在し、高地性の遺跡として考えられている。

古墳時代の古墳として、坂城地区には後期古墳と思われる北日名塚穴1・2号墳(40-1・2)、金比羅山古墳(37)、塚内古墳(26)の4基の古墳が知られているに過ぎない。また、隣接する中之条地区では、東平古墳群が調査(平成5年度、長野県埋蔵文化財センター)され、5世紀中葉に1号墳が築造され、その後2号墳が築造されたとされている。

奈良時代では、集落址の状況は不明である。生産遺跡としては、栗田窯跡(43)、土井ノ入窯跡(32)があげられる。これらの遺跡の立地は、南面する斜面、西面する斜面に位置している。

平安時代では、9世紀初頭の寺院址と思われる込山廃寺(54)、土井ノ入窯跡(32)の瓦窯があげられる。土井ノ入窯跡で生産された瓦は、込山廃寺や上田市信濃国分寺・尼寺や更埴市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されたことが明らかとなっている。他に、11世紀末に位置づけられる北日名経塚(40)があり、銅製経筒、和鏡、白磁輪花小皿などが出土している。現在、これらの遺物は、東京国立博物館に所管されている。

中世では、嘉保1(1094)年信濃国更級郡に配流された源顕清(盛清)が始祖と考えられている村上氏が国人領主として成長し、戦国時代の武将村上義清が活躍した。その村上氏の居城が葛尾山頂に位置する葛尾城跡(44)で、その下方に位置する現在満泉寺の所在する一帯が村上氏館跡(38)である。葛尾城は、天文22(1553)年に武田信玄の攻略により落城したため、現存していない。満泉寺は、天正10(1582)年村上義清の子景国により、村上氏の先祖代々の菩提寺として建立されたとされている。

近世では北国街道(90)の制定により、交通のうえで重要な位置をしめ坂木宿が宿駅として発展した。また、坂木・中之条村は幕府の天領となり、宝暦9(1759)年中野陣屋に移るまで、坂木陣屋が置かれていたが、安永8(1779)年中之条陣屋に移ったとされている。

以上簡単ではあるが、坂城地区の遺跡と歴史についてふれた。



- 8 中之条遺跡群 (縄～平) 21 開畝遺跡 (弥～平) 23 四ツ屋遺跡群 (縄～平) 24 戌久保遺跡 (古～平)
 25 入田遺跡 (奈～平) 26 塚内古墳 (古墳) 27 金比羅山遺跡 (縄～平) 28 遠平経塚 (中世)
 29 岡の原竈跡 (平安) 30 込山遺跡群 (縄～平) 30-1 込山A遺跡 (縄～平) 30-2 込山B遺跡 (縄～平)
 30-3 込山C遺跡 (縄～平) 30-4 込山D遺跡 (縄～平) 30-5 込山E遺跡 (弥～平)
 31 日名沢遺跡群 (弥～平) 31-1 日名沢遺跡 (弥～平) 31-2 丸山遺跡 (弥～平)
 32 土井ノ入竈跡 (奈～平) 33 平林遺跡 (縄文) 34 垣外竈跡 (平安) 37 金比羅山古墳 (古墳)
 38 村上氏館跡 (中世) 40 北日名経塚 (中世) 41 北日名塚穴古墳群 (古墳)
 41-1 北日名塚穴1号墳 (古墳) 41-2 北日名塚穴2号墳 (古墳) 42 梅ノ木遺跡 (縄文)
 43 栗田竈跡 (奈良) 44 葛尾城跡 (中世) 54 込山廃寺跡 (平安) 55 観音平経塚 (中世)
 56 栗田小鍛冶跡 (中世) 57 塩之原遺跡 (奈～平) 58 南日名遺跡 (弥～平)
 59 葛尾城根小屋跡 (中世) 60 姫城跡 (中世) 61 坂木代官所跡 (近世)
 62 田町遺跡群 (古～平) 63 御所沢墳墓群 (中世) 66 砥沢古墳 (古墳)
 90 横吹北国街道跡 (近世)

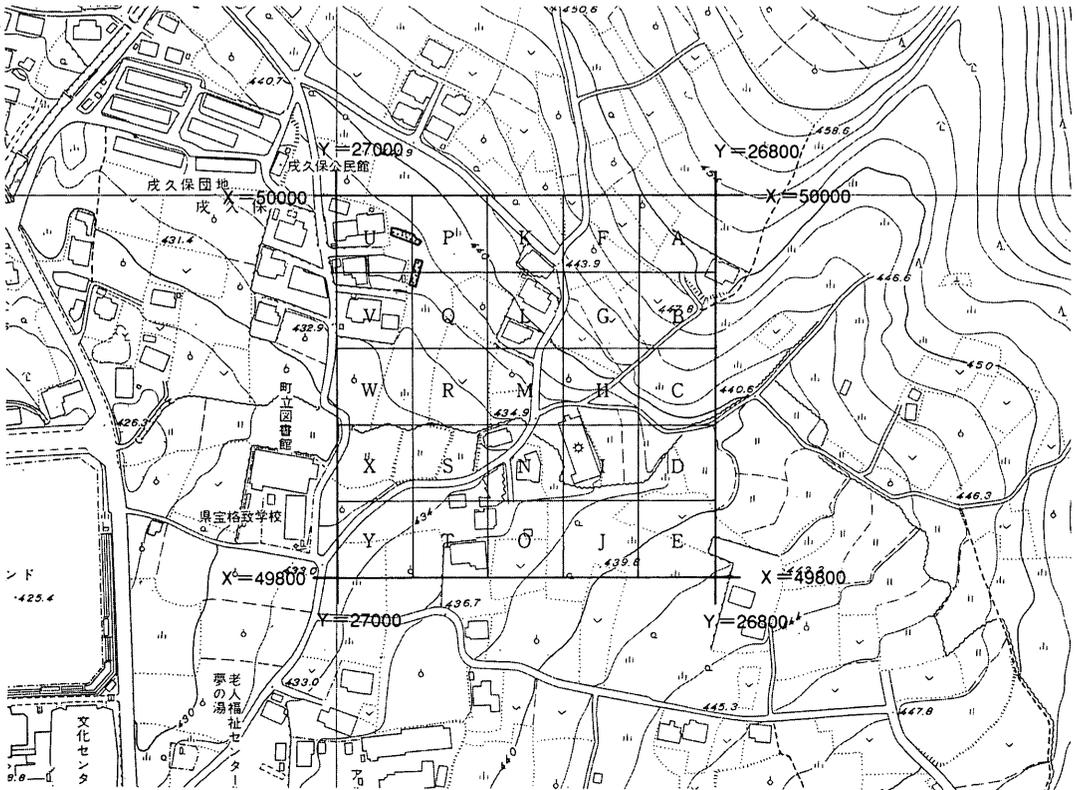
第2図 周辺遺跡分布図

第3節 調査の概要

1 調査の方法

本遺跡の調査には、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお周辺に存在する遺構・遺物の調査にも整合できるように、Ⅷ系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドは、200m×200mの大グリッドを設け区画を行った。その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第3図）し、北東端より、A・B・C・・・Y区とアルファベットの大きい文字で命名した。本調査区では、P・Q・U・V区が相当する。本来ならば、その中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で1・2・3・・・10、東西列を東から五十音順であ・い・う・・・ことし、各グリッドの北東交点を小グリッドとするわけであるが、発掘調査では、宅地造成事業に伴う道路建設部分のみを調査するといった小面積の調査であった事もあり、小グリッドの設定は行わなかった。

遺構の実測は、1/20を基本として平板測量等で行った。

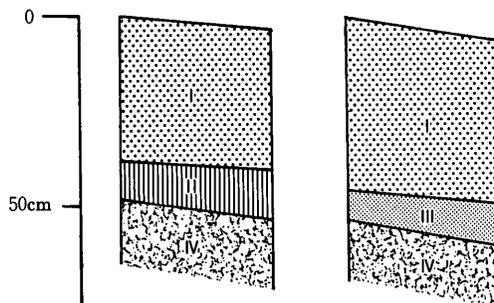


第3図 成久保遺跡発掘調査区設定図

2 基本層序

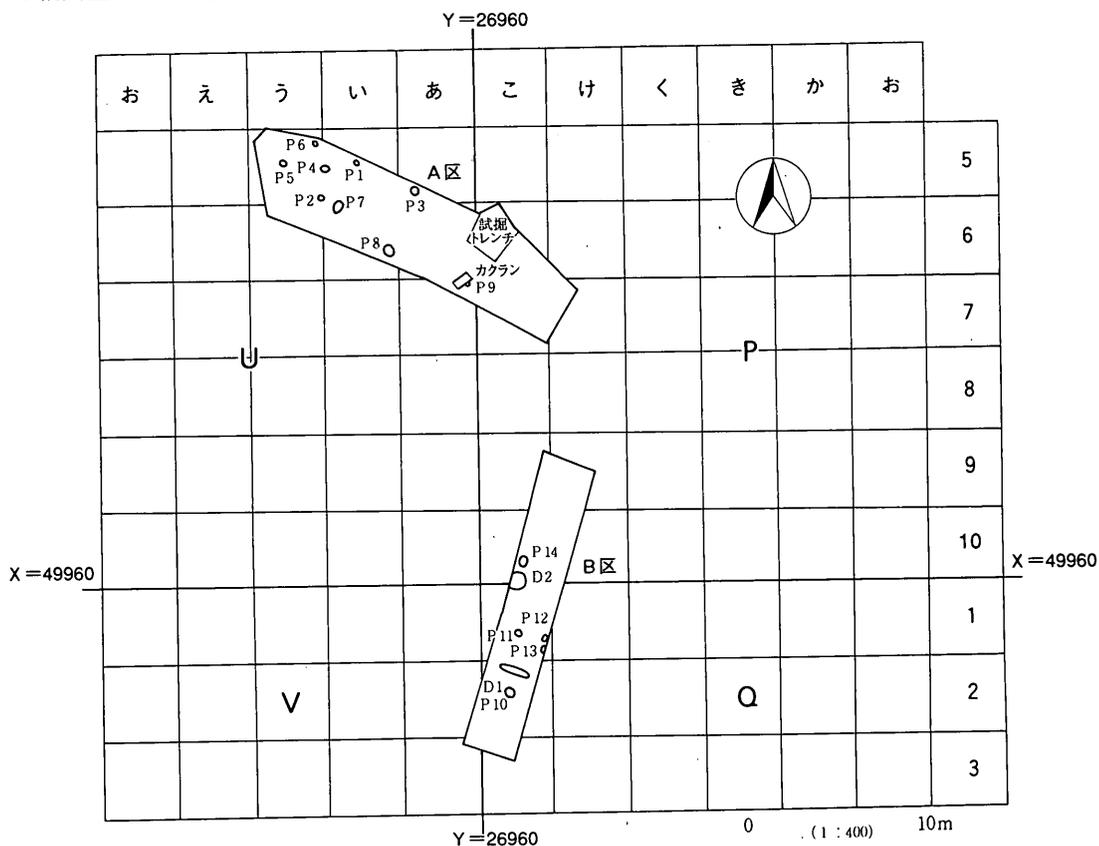
戌久保遺跡の調査区内では、I層からIV層に分けられる。

I層は暗褐色を呈す耕作土である。II層は調査区の西側にのみ確認できる暗褐色を呈する土層で、耕作土の影響を多分に受けている。本土層中から、土器片が出土しており、遺物包含層といえる。III層は褐色土層である。III層もII層同様に遺物包含層と考えられる。IV層は遺構の検出面にあたり、にぶい黄褐色を呈する粘質土で、礫を多く含んでいる。



- I層 暗褐色土 (10YR 4/3) 耕作土。
- II層 暗褐色土 (10YR 4/3) 粘質土。
- III層 褐色土 (10YR 4/4) 粘質土。
- IV層 にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) 粘質土。遺構検出面。

第4図 基本層序模式図



第5図 戌久保遺跡遺構配置図

第4節 調査の結果

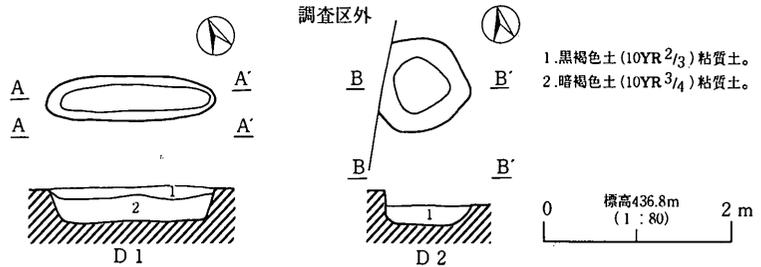
1 土坑址

1) D1号土坑址

遺構 (第6図)

検出位置 B区 Vこ

2グリッド。重複関係なし。平面形態 長軸約1.8m、短軸約48cmの



第6図 D1・D2号土坑址実測図

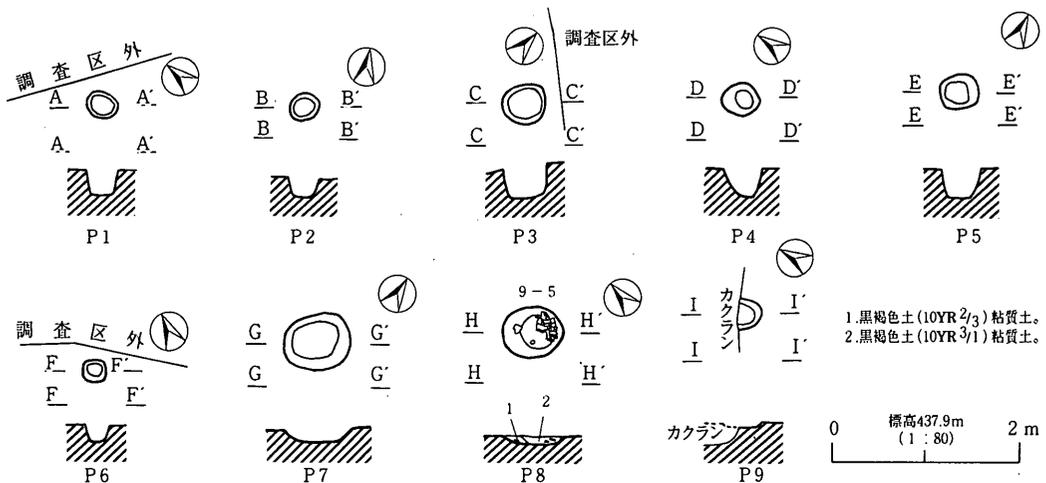
隅丸長方形を呈する。底面は平坦で、断面形態は逆台形を呈する。主軸方位はN-68°-Wを指す。

時期 出土遺物はなく、本土坑址の所属時期は不明である。

2) D2号土坑址

遺構 (第6図)

検出位置 B区 Uこ10、Vこ1グリッド。重複関係なし。平面形態 短軸約98cmの楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で、断面形態は鍋底状を呈すると思われる。主軸方位はN-70°-Wを指すと思われる。時期 出土遺物はなく、本土坑址の所属時期は不明である。

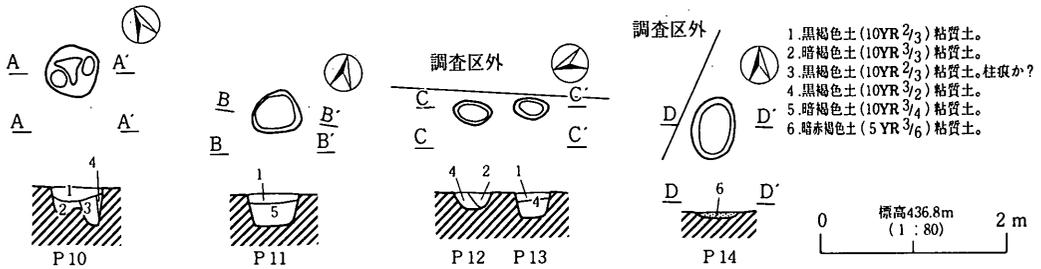


第7図 A区 P1～P9実測図

2 ピット

遺構 (第7・8図)

本調査区内から14個のピットが検出されている。しかしながら、調査面積が少ないことや平面形、規模等に統一制がなく、建物址等と確定する事ができないと判断した。また出土遺物が無いものも多く個々の性格や時期判断は困難なものが多い。その中で、P 8からは土師器甕が潰れた状態で出土した。

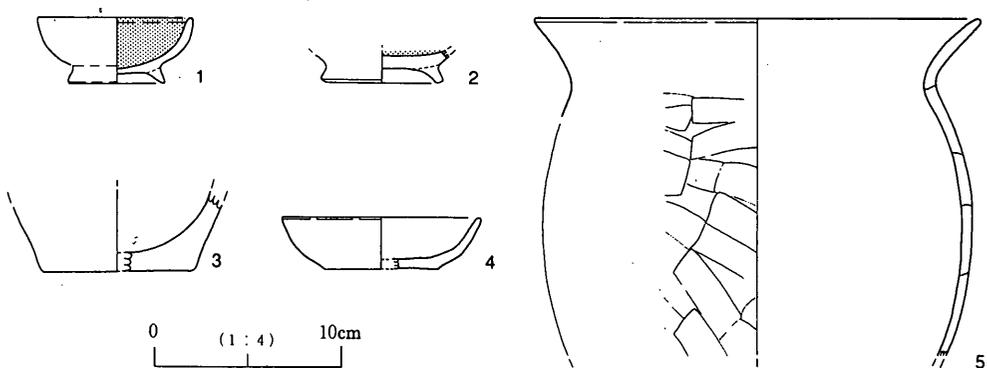


第8図 B区 P10～P14ピット実測図

遺物 (第9図)

5はP 8から出土した土師器甕である。口縁部が「く」の字状に外反し、胴部が膨らむ器形を呈する。外面胴部にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

3 遺構外出土遺物



第9図 P 8・遺構外出土土器実測図

遺物 (第9図)

遺構外遺物として図示したものは、4点である。1・2は土師器椀で、内面黒色処理が施される。3は土師器甕の底部である。4は土師器坏であり、底部に回転糸切り痕が残り、器高が低いものである。かわらけ状を呈する。

第5節 総括

今回の調査によって得られた成果は、土坑址2基、ピット14基の検出であった。調査範囲が宅地造成事業実施予定地の道路敷の約120㎡と限定された狭い範囲となったため、発掘調査結果からは断片的な事実のみ窺い知る事ができた。戌久保遺跡の性格については、今回の調査結果のみではなく、今後の周辺の調査結果をふまえながら考察する必要がある。

周辺の遺跡として、今回の調査地から約300m離れた南西する斜面に位置する開畝遺跡(註1)では、奈良時代末～平安時代初頭を主体とする竪穴住居址6棟や中世の土坑址等が検出されている。古代に限っては戌久保遺跡と時期的には近い集落址と言えよう。発掘調査結果から開畝遺跡の古代集落址の分布については、調査区の西側に展開していることが看取される。詳細については報告書の刊行を待ちたい。

戌久保遺跡の今回の調査によって、古墳時代後期から平安時代にいたる遺物を包含し、主体が平安時代に所属する遺跡であったことが判明したことは、集落址の検出がなかったけれども、大きな成果という事ができる。遺構外の一括出土遺物には、ローリングを受けた土師器片も出土しているため、今回の調査地から北側等に、密度の濃い集落址が展開している可能性も考えられるからである。『坂城町誌』(註2)は平安時代(11世紀)の土師器甕・坏・椀などが採集され資料報告がなされているが、これらの集落址が周辺に展開していることはまちがいないと思われる。今回の調査では、遺跡の状態が希薄な部分が多かったが、集落址の展開は、より斜面の上方等、周辺に求めることができよう。

平安時代の集落址としての戌久保遺跡は、坂城町において重要な位置を占めるものと考えられ、本遺跡の解明のためには今後の調査に委ねられ、資料の蓄積を待たねばならないと言えよう。

註

註1 平成4年長野県埋蔵文化財センター調査。

(財)長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報9』1992年

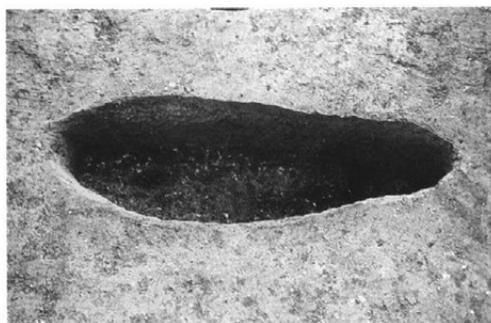
註2 森嶋 稔 『坂城町誌中巻 歴史編(一)』1981年 坂城町誌刊行会



A区完掘



B区完掘



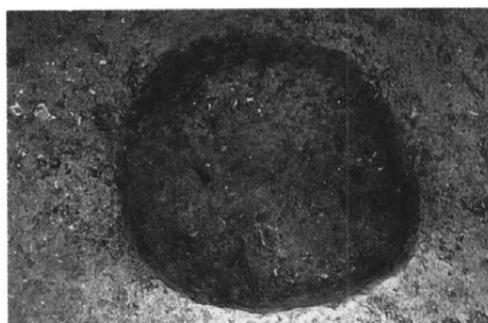
D 1号土坑址



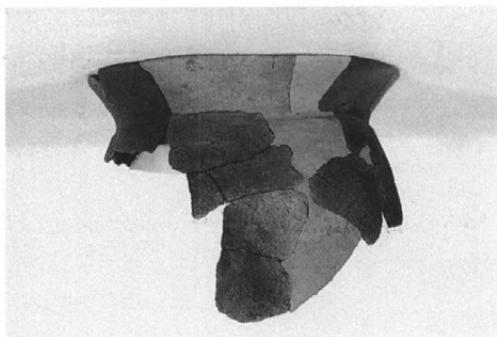
D 2号土坑址



P 8土器出土状况



P 8完掘状况



P 8土師器甕 9-5

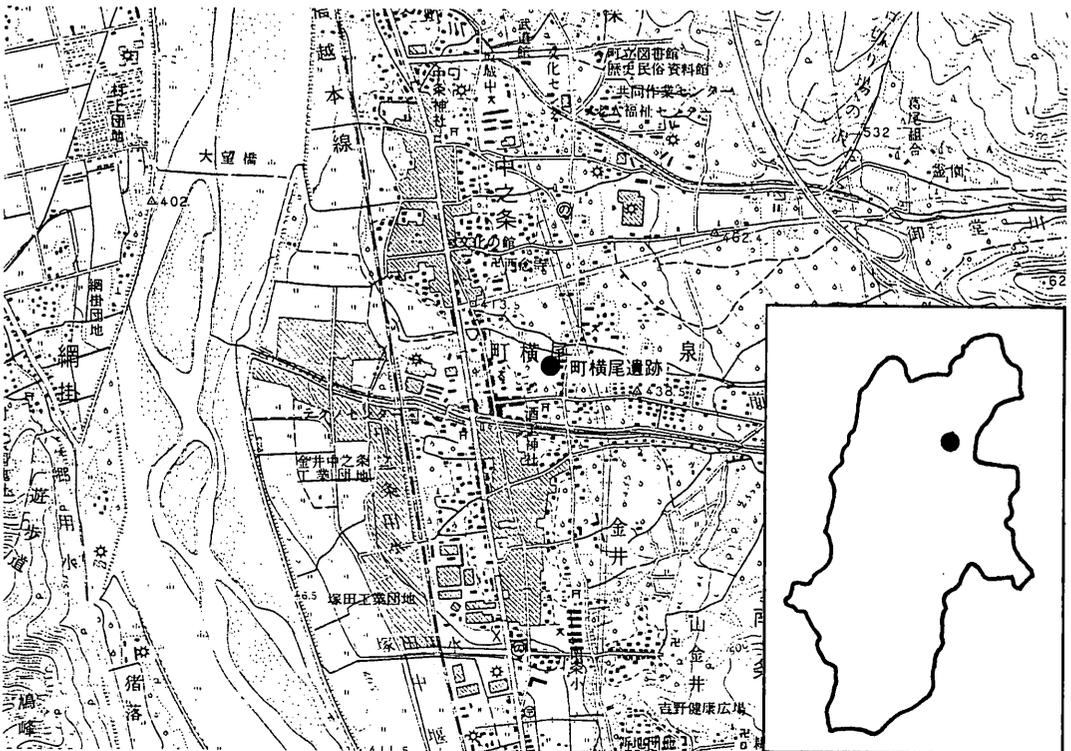
第II章 町横尾遺跡

第1節 発掘調査の経緯

1 発掘調査に至る動機と経緯

町横尾遺跡は、坂城町南条に所在し、標高424m前後を測る谷川によって形成された扇状地の扇中央部に位置する。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の散布地とされてはいるが、同遺跡内に戦国時代の国人領主村上義清の子にあたる村上景国が処ったとされる観音坂城跡も存在しており、関連する中世の遺構の存在が予想されるなど、古代・中世の遺跡である可能性が高い。しかしながら、本遺跡内あるいは周辺を伺い知る文献及び発掘調査例がなく、詳細な遺跡の性格は不明な状態であった。

今回、坂城町土地開発公社が行う宅地造成事業が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされることとなり、坂城町土地開発公社と坂城町教育委員会による保護協議の結果、開発対象地の遺跡の状況確認のため、平成8年11月に試掘調査を実施した。この結果、遺跡が希薄なところが確認されたため、遺構の検出された約1000㎡を対象とした発掘調査を行う運びとなった。



第1図 町横尾遺跡位置図

2 調査の構成

平成8年度発掘調査体制

- 調査指導者 塩入 秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会員）
担 当 者 助川 朋広・小平 光一（坂城町教育委員会学芸員）
調査補助員 天田 澄子、萩野れい子（以上、町臨時職員）
調査協力者 伊藤 篤、上野 かず江、尾山 直久、栗林 初恵、斉藤 義治、沢崎 茂子、
清水 よ志、中村 静枝、羽毛田 とし子、柳沢 勲夫
（以上、更埴地域シルバー人材センター）

（事務局）

- 教育長 西沢 民雄
社会教育課長 塩野入 猛 文化財係長 青木 昌也
文化財係 助川 朋広、小平 光一

平成9年度 整理調査体制

- 調査指導者 塩入 秀敏（前 出）
調査担当者 助川 朋広（前 出）
調査補助員 塩野入 早苗、萩野 れい子、宮尾 美代子（以上、町臨時職員）
協 力 者 上野 かず江、臼井 かね、大柴 はつひ、達家 みさえ
（以上、更埴地域シルバー人材センター）

（事務局）

- 教育長 大橋 幸文
生涯学習課長 赤池 利博 文化財係長 池田 美智康
文化財係 助川 朋広、小平 光一
塚田 千代（町臨時職員）

3 調査日誌

(平成8年度 現地調査)

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|------------------------------------|
| 11月14日 | バックホーによる表土剥ぎを開始。 | 12月4日 | H1・2号住居址調査。土坑址、ピットの調査。 |
| 11月16日 | バックホーによる表土剥ぎを終了。
器材搬入を行う。 | 12月10日 | H2号住居址のカマドの調査を行う。 |
| 11月18日 | 協力者を加え調査の開始。
遺構の検出作業を行う。 | 12月11日 | 調査区中央のピット群の調査を行う。 |
| 11月21日 | H1号住居址の掘り下げを開始。 | 12月12日 | Q1号特殊遺構の掘り下げを行う。 |
| 11月26日 | Ta1号竪穴状遺構の調査開始。 | 12月17日 | 航空写真の撮影後、器材搬出を行い
本日をもって調査を終了する。 |

(平成9年度整理調査)

- | | | | |
|-------|----------------|-------------|--------------------------|
| 1月5日 | 土器洗いを開始する。 | 1月22日～3月20日 | 図面の修正・トレス等
を行い報告書の刊行。 |
| 1月14日 | 土器の注記・接合を開始する。 | | |

第2節 遺跡の立地と環境

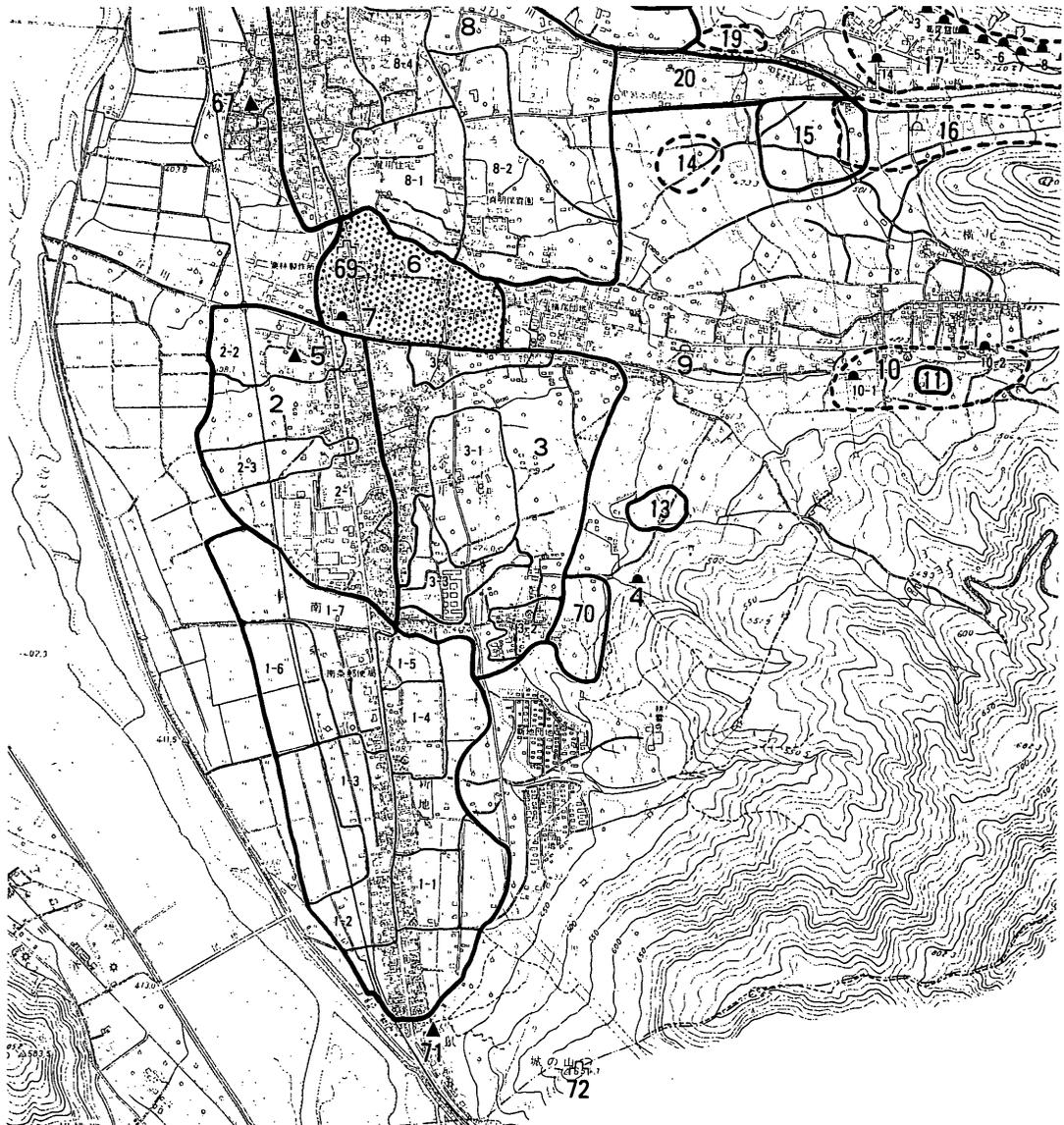
1 歴史的環境

坂城町の自然堤防や小河川によって形成された複合扇状地には、いくつもの遺跡が存在し、遺跡の性格も多種多様である。ここでは、遺跡の所在する南条地区を中心とした歴史的環境を時代ごとに見ていく事とする。

旧石器時代の遺跡としては、採集遺物のため詳細は不明であるが、保地遺跡(3-1)から上ケ屋型彫刻器や小型の槍先形尖頭器が数点採集されている。遺跡の立地は、千曲川の段丘状地形上である。

縄文時代では、東裏遺跡II(1-1、平成4・5年調査)から中期初頭の五領ケ台式土器の出土や晩期氷I式などの土器が出土している。出土遺物量が少ないが、更埴市屋代遺跡群などでみられた沖積地での集落址検出のあり方同様に注意を要する。また、千曲川の段丘上に位置する保地遺跡(3-1、昭和40年調査)から後期堀之内式、加曽利B式の土器群や晩期大洞式などの土器群が出土している。

弥生時代後期後半の箱清水式土器が出土している遺跡は、百々目利遺跡(1-3)、中町遺跡



- 1 南条遺跡群 (弥~平) 1-1 東裏遺跡 (縄~平) 1-2 御殿裏遺跡 (弥~平) 1-3 百々目利遺跡 (弥~平)
 1-4 中町遺跡 (弥~平) 1-5 田町遺跡 (弥~平) 1-6 廻り目遺跡 (弥~平) 1-7 塚田遺跡 (弥~平) 1-8 青木下遺跡 (縄~平)
 2 金井西遺跡群 (縄~平) 2-1 金井遺跡 (縄~平) 2-2 社宮神遺跡 (縄~平) 2-3 並木下遺跡 (縄~平)
 3 金井東遺跡群 (縄~平) 3-1 保地遺跡 (縄~平) 3-2 山金井遺跡 (縄~平) 3-3 大木久保遺跡 (縄~平)
 3-4 酒玉遺跡 (縄~平) 4 栗ヶ谷古墳 (古墳) 5 社宮神経塚 (中世) 6 町横尾遺跡 (縄~平)
 7 北畑古墳 (古墳) 8 中之条遺跡群 (縄~平) 8-1 寺浦遺跡 (縄~平) 8-2 上町遺跡 (弥~平)
 8-3 東町遺跡 (弥~平) 8-4 北浦遺跡 (縄~平) 9 南条塚穴古墳 (古墳) 10 谷川古墳群 (古墳)
 10-1 入横尾支群向田古墳 (古墳) 10-2 入横尾支群刈塚古墳 (古墳) 11 入横尾遺跡 (平安)
 13 前原墳墓群 (中世~近世) 14 御堂川古墳群山口支群 (古墳) 15 山崎遺跡 (縄文)
 16 御堂川古墳群山崎支群 (古墳) 17 御堂川古墳群前山支群 (古墳) 17-1 前山1号墳 (古墳) 17-2 前山2号墳 (古墳)
 17-3 前山3号墳 (古墳) 17-5 前山5号墳 (古墳) 17-6 前山6号墳 (古墳) 17-7 前山7号墳 (古墳) 17-8 前山8号墳 (古墳)
 17-9 前山9号墳 (古墳) 17-14 前山14号墳 (古墳) 19 御堂川古墳群山田支群 (古墳) 20 愚鏡堂遺跡 (縄~平)
 21 開畝遺跡 (弥~平) 67 中之条代官所跡 (近世) 69 観音坂城跡 (中世) 70 南鯉の川遺跡 (奈~中世)
 71 口留番所跡 (近世) 72 和合城跡 (中世)

第2図 周辺遺跡分布図

(1-4)、塚田遺跡(1-7、平成4年調査)、集落址の調査を行った塚田遺跡Ⅱ(平成5年調査)のように千曲川の自然堤防上あるいは中洲に立地しているものと、保地遺跡(3-1)などにみられるように千曲川の段丘上に位置する遺跡がある。

古墳時代では、後期古墳あるいは終末期古墳と推定されている古墳群が谷川古墳群(10)である。他には北畑古墳(7)が存在している。南条地区の古墳は、すでに消滅してしまっている可能性があることも考慮する必要がある。後期の集落址では、東裏遺跡Ⅱ(1-1、平成4、5年調査)があり、祭祀遺跡・集落址としては青木下遺跡Ⅱ(1-8、平成8年度調査)がある。祭祀遺構は、土器列が環状を構成していたものやブロック状に遺物が検出され、祭祀に伴うと考えられる土器は、後背湿地に近いところから検出されていて、古墳時代後期を主体とする祭祀遺跡といえよう。出土遺物から6世紀中葉頃の祭祀は、ブロック状に土器を廃棄するのに対し、6世紀末～7世紀前半の祭祀は環状に土器を廃棄する可能性があり、祭祀行為の変遷を示唆している可能性が高い。

奈良時代の遺跡については、東裏遺跡Ⅱ(1-1)から集落址が検出されている他は不明なところが多い。

平安時代では、東裏遺跡Ⅱ(1-1)から集落址が検出されている他は、青木下遺跡(1-8)、塚田遺跡(1-7)で仁和4(888)年の千曲川の大洪水と考えられる沈澱砂層に被覆された状態で、水田址が検出されている。

中世では、嘉保1(1094)年信濃国更級郡に配流された源頭清(盛清)が始祖と考えられている村上氏が成長し、戦国時代には国人領主として村上義清が活躍した。このような歴史背景のなかで、坂城地区に所在する北日名経塚・観音平経塚などの他に、南条地区にも社宮神経塚(5)の宗教的な遺跡がある。和鏡3面、金の延棒、金の小粒、開元通宝などが珠洲系の壺内に内容されていたようである。現在は、和鏡3面、金の小粒、永楽通宝338枚が個人所有されており、和鏡はすべて室町時代に所属すると思われる。その他、村上義清の子景国が処ったとされる観音坂城(69)があるが文献等が不明であり、詳細は不明である。

近世では、北国街道の制定により、松代藩の私宿である鼠宿が置かれるなど交通の上で重要な位置をしめることとなった。

以上簡単ではあるが、南条地区の遺跡と歴史についてふれた。

第3節 調査の概要

1 調査の方法

本遺跡の調査には、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお周辺に存在する遺構・遺物の調査にも整合できるように、Ⅷ系国家座標の座標軸を基にグリッドを設定した。グリッドの設定にあたっては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第4図）し、北東端より、A・B・C・・・Y区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、中グリッドはX・Y・D・E区が相当する。その中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で1・2・3・・・10、東西列を東から五十音順であ・い・う・・・ことし、各グリッドの北東交点を小グリッドとするよう設定した。（第5図）

遺構外出土遺物の取扱い及び遺構の検出位置は、小グリッド単位で行った。また、遺構の実測は、1/20を基本として簡易遣り方測量、航空測量による図化を行った。

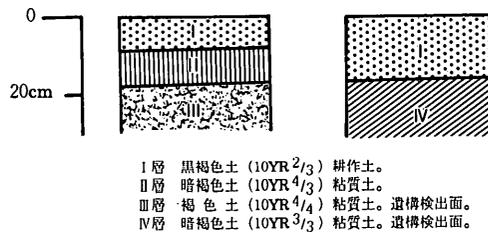
2 基本層序

町横尾遺跡の調査区内では、I層からIV層に分けられた。

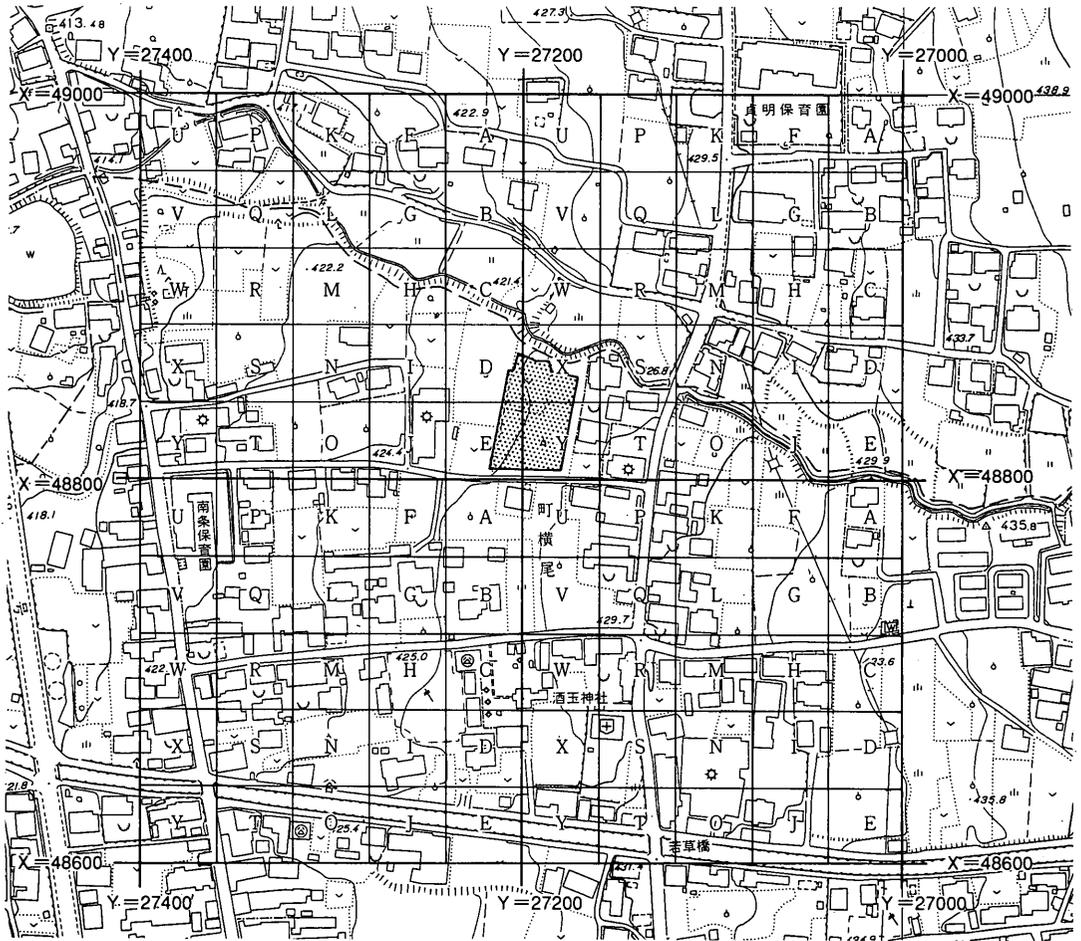
I層は黒褐色の耕作土である。

II層は暗褐色を呈する粘質土、III層は褐色を呈する粘質土である。また、調査区の南西側のみIV層が確認され、暗褐色を呈する砂礫層である。

遺構の検出は、III層の暗褐色土とIV層の暗褐色砂礫層で行った。

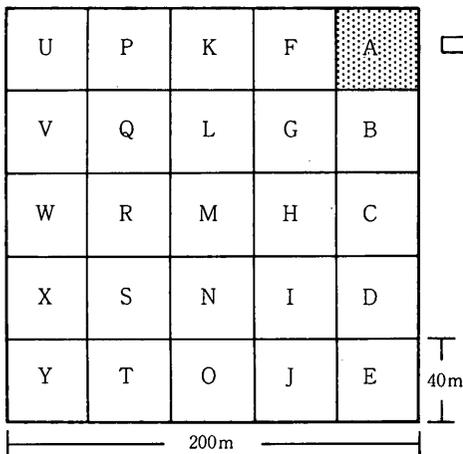


第3図 基本層序模式図

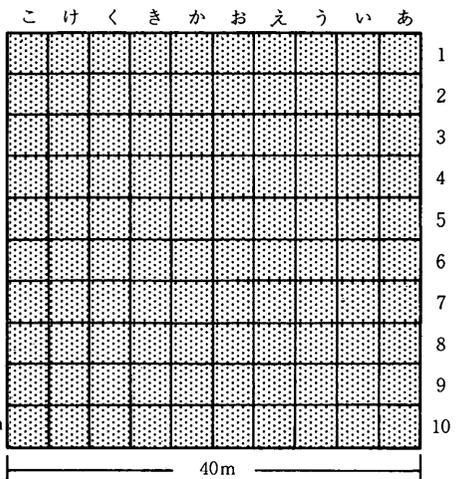


第4図 町尾遺跡発掘調査区設定図 1:4000

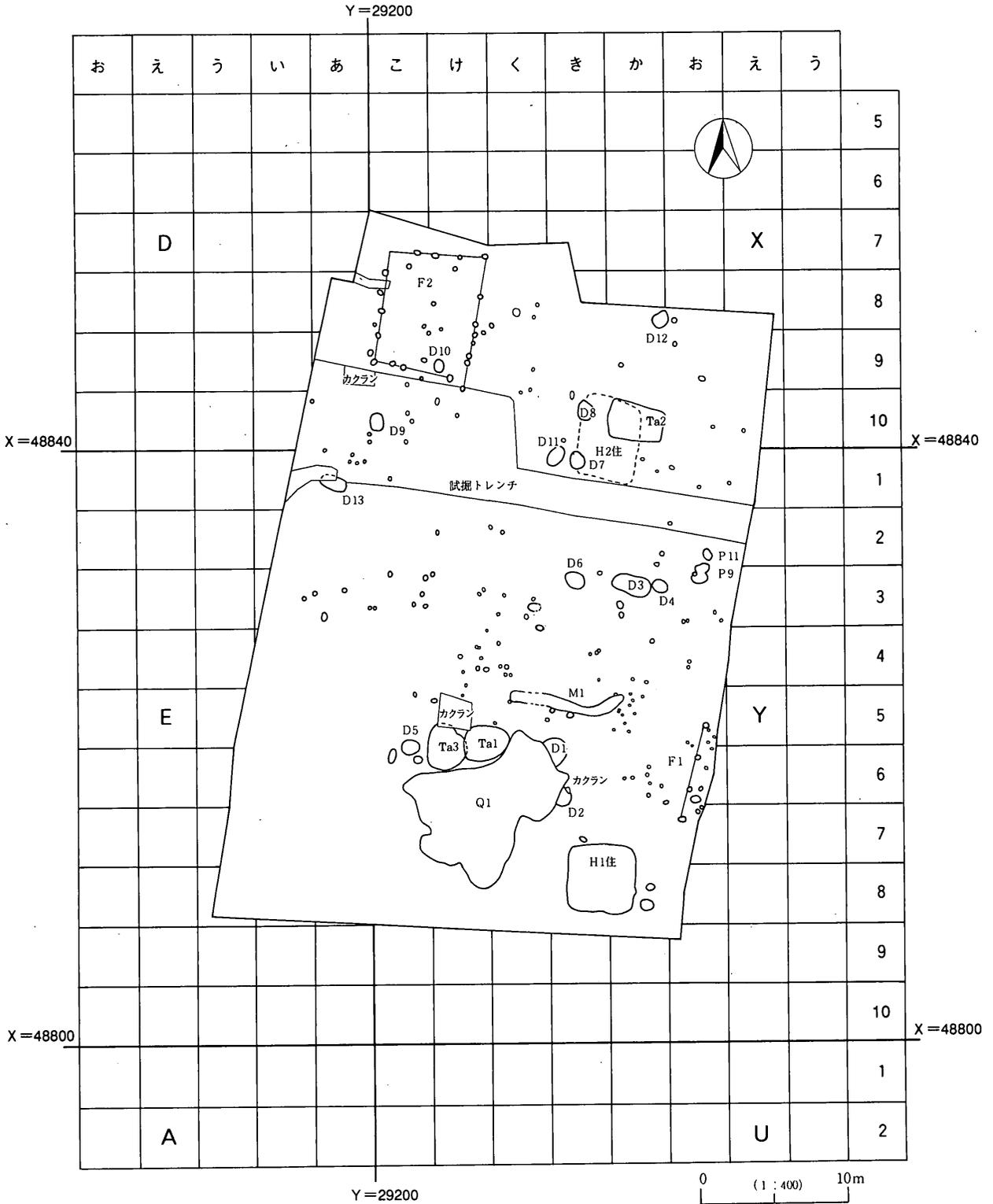
中グリッド図



小グリッド図



第5図 グリッド設定概念図



第6図 遺構配置図

第4節 調査の結果

1 竪穴住居址

1) H1号住居址

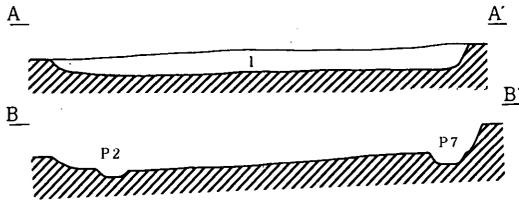
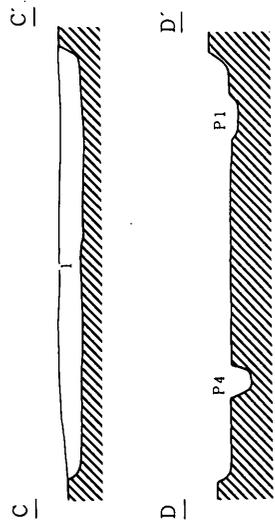
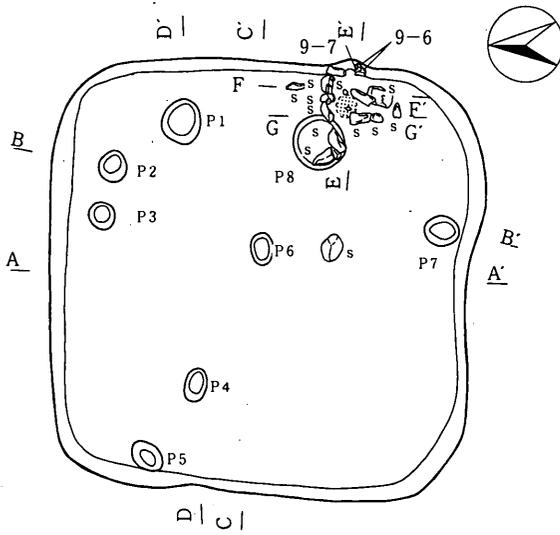
遺構 (第7図)

検出位置 Yか7・8、Yき7・8グリッド。**重複関係** なし。**平面形態** 長軸4.28m、短軸4.12mの隅丸方形を呈する。主軸方位はN-90° - Eを指す。壁残高は11~38cmを測る。覆土黒褐色の粘質土に被覆されていた。地山IV層中の礫を含んでいる。**床面の状態** 概ね平坦ではあるが、全体的に軟弱な床面である。**ピット** 8基検出され、P1、P4が支柱穴とも考えられるが対になるピットが検出できず、断定できない。P1は楕円形を呈し、深さ10cmを測る。P2は楕円形で、深さ12cmを測る。P3は楕円形で、深さ15cmを測る。P4は長楕円形で、深さ22cmを測る。P5は楕円形で、深さ10cmを測る。P6は長楕円形で、深さ15cmを測る。P7は楕円形で、深さ12cmを測る。P8はカマド西側より検出されたもので、楕円形を呈し深さ4cmを測る。カマド 東壁中央南よりに位置し、遺存状況は比較的良い。袖部の構築に際しては、礫を左右両袖に配している状況が観察できた。主軸方位はN-93° - Eを指す。**遺物の出土状況** 散漫な状況であり、覆土中から少量の土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。カマド覆土中より、第9図6・7の土師器甕が出土している。

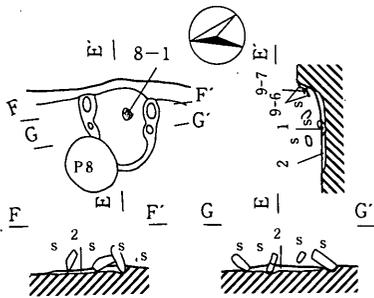
遺物 (第8・9図)

本住居址の出土遺物として、図化できたものは7点である。須恵器の坏には1・2があり、1は底部の回転ヘラケズリが未処理のままである。土師器の坏としては、3~5があり、3・4は内面黒色処理の施されるものである。6・7は土師器の甕で、コの字型の頸部を呈し、外面頸部以下にヘラ削りが施されているいわゆる北武蔵型の甕である。

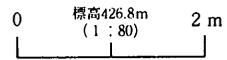
時期 本住居址の所属時期は、出土遺物に時間差が見られるが、平安時代(9世紀後半~10世紀前半)に位置づけられる。



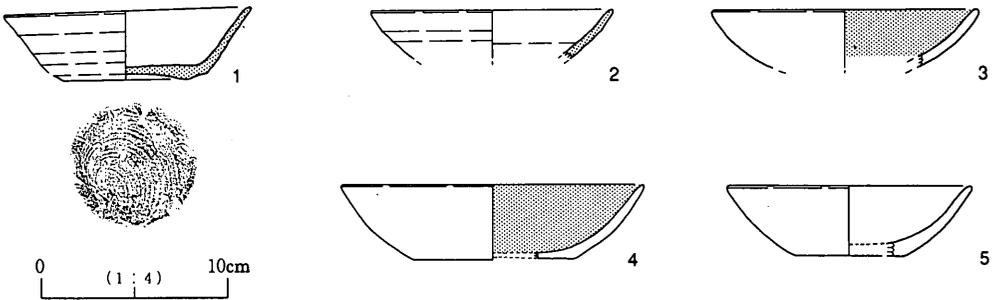
1. 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘質土。



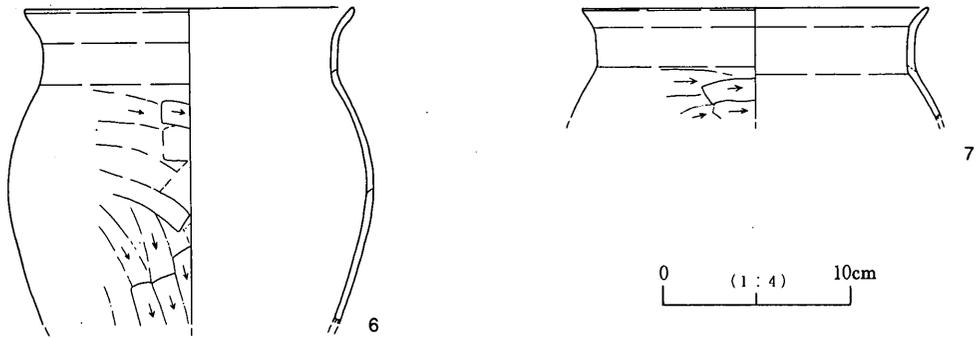
1. におい赤褐色土 (5YR 4/4) 焼土。
2. 黒褐色土 (10YR 2/3) カマド掘り方埋土。



第7図 H1号住居址実測図



第8図 H1号住居址出土土器実測図



第9図 H1号住居址出土土器実測図

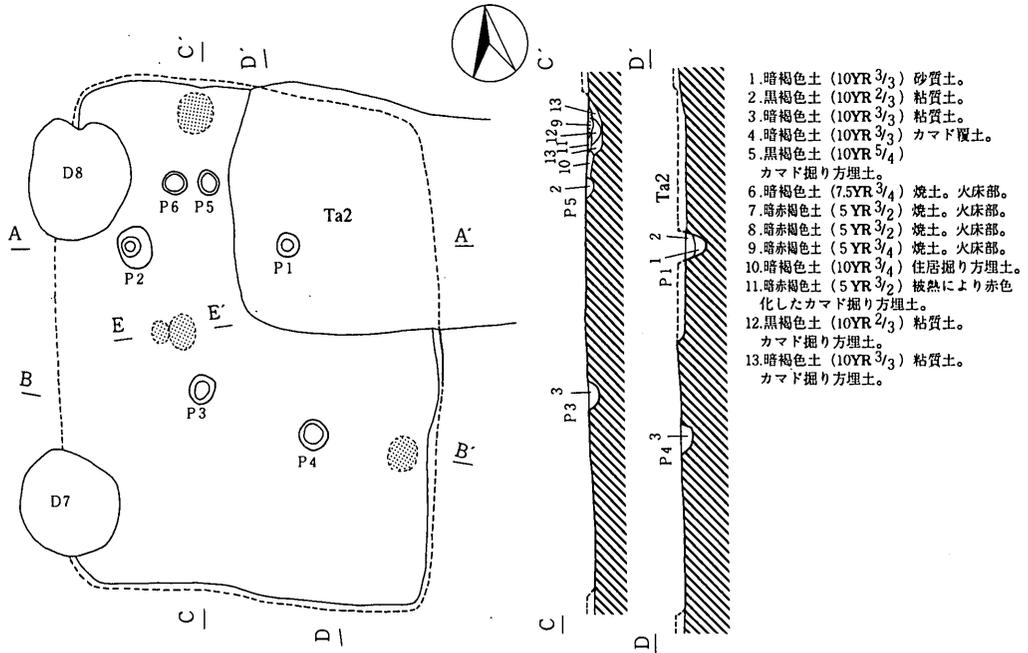
2) H2号住居址

遺構 (第10図)

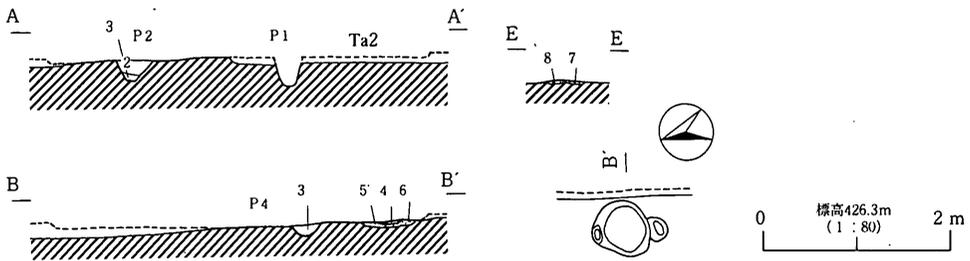
検出位置 Xか10、Xき10、Yか1、Yき1グリッド。**重複関係** Ta2号竪穴状遺構、D7・8号土坑址に、北・東壁面、北・東床面、西壁面、西床面の一部を破壊される。**平面形態** 長軸5.36m、短軸4.04mの隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方位はN-7°-Eを指すと思われる。壁残高は0~3cmを測る。**覆土** 遺構検出面とした地山第Ⅲ層で検出したが、床面までの掘り込みが浅い住居址であったため、耕作によって、床面まで破壊されていた部分が多く、覆土の観察はできなかった。**床面の状態** 概ね平坦ではあるが、軟弱な床面であった。住居址中央や西側に2箇所焼土址が並んで検出された。詳細は不明であるが、被熱によるもので、明確な掘り込みは確認されなかった。**ピット** 6基検出され、P1、P2、P3が支柱穴とも考えられるが断定はできない。P1は楕円形を呈し、深さ22cmを測る。P2は楕円形で、深さ22cmを測る。P3は楕円形で、深さ13cmを測る。P4は楕円形で、深さ12cmを測る。P5は楕円形で、深さ4cmを測る。P6は楕円形で、深さ9cmを測る。**カマド** 東壁中央やや北側に位置したものと、東壁中央南側に位置したものの2基検出された。遺存状況は共に悪く、火床面の焼土のみが残っていた状態である。これらのカマドの使用状態については、不明なところが多く、当初どちらか1基のカマドのみ使用していたものが、移築等の理由により2基となったのか、また当初から2基あったかといった事に関しては、不明である。**遺物の出土状況** 住居址の検出が床面以下となってしまうため、覆土中からの遺物がないため、当然遺物量は多いとはいえない。出土した遺物は、散漫な状況で、床面上から少量の土師器碗・羽釜が出土した。

遺物 (第11・12図)

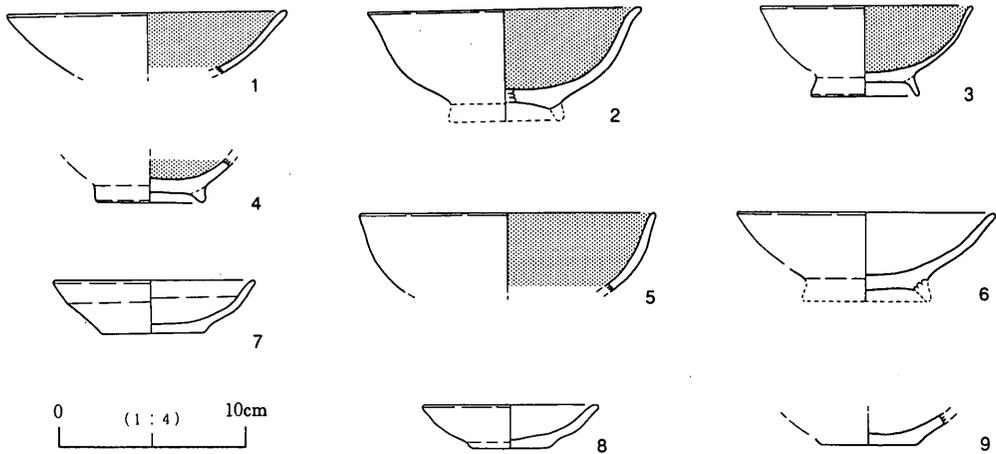
本住居址の出土遺物として、図化できたものは11点である。1は土師器の坏で、内面黒色処理が施されている。2・3は土師器の高台付きの碗で、内面黒色処理が施される。4・5は内面黒



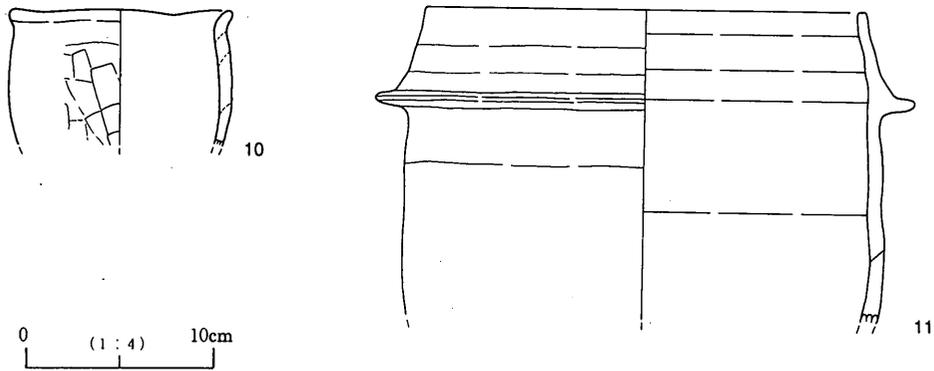
1. 暗褐色土 (10YR 3/3) 砂質土。
2. 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘質土。
3. 暗褐色土 (10YR 3/3) 粘質土。
4. 暗褐色土 (10YR 3/3) カマド覆土。
5. 黒褐色土 (10YR 5/4) カマド掘り方埋土。
6. 暗褐色土 (7.5YR 3/4) 焼土。火床部。
7. 暗赤褐色土 (5YR 3/2) 焼土。火床部。
8. 暗赤褐色土 (5YR 3/2) 焼土。火床部。
9. 暗赤褐色土 (5YR 3/4) 焼土。火床部。
10. 暗褐色土 (10YR 3/4) 住居掘り方埋土。
11. 暗赤褐色土 (5YR 3/2) 被熱により赤色化したカマド掘り方埋土。
12. 黒褐色土 (10YR 2/3) 粘質土。カマド掘り方埋土。
13. 暗褐色土 (10YR 2/3) 粘質土。カマド掘り方埋土。



第10図 H2号住居址実測図



第11図 H2号住居址出土土器実測図



第12図 H2号住居址出土土器実測図

色処理の施されている土師器の高台付き椀と思われる。6は土師器の椀である。7～9は土師器の坏で、小型でかわらけ状を呈するものである。10は土師器の小型甕で、外面に縦位のヘラケズリが施される。11は羽釜である。

時期 本住居址の所属時期は、出土遺物から平安時代(11世紀後半)に位置づけられる。

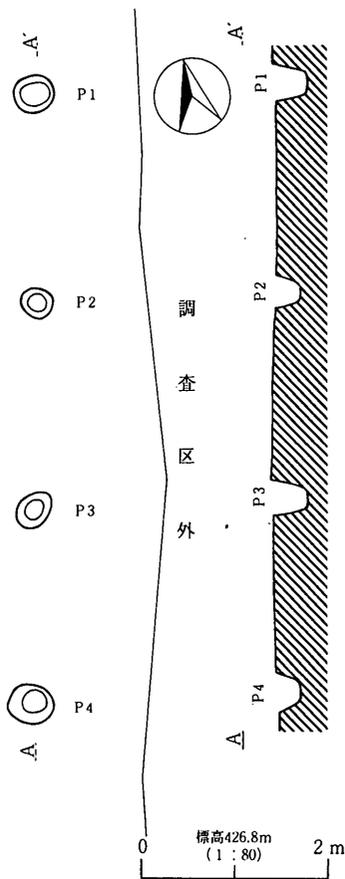
2 掘立柱建物址

1) F1号掘立柱建物址

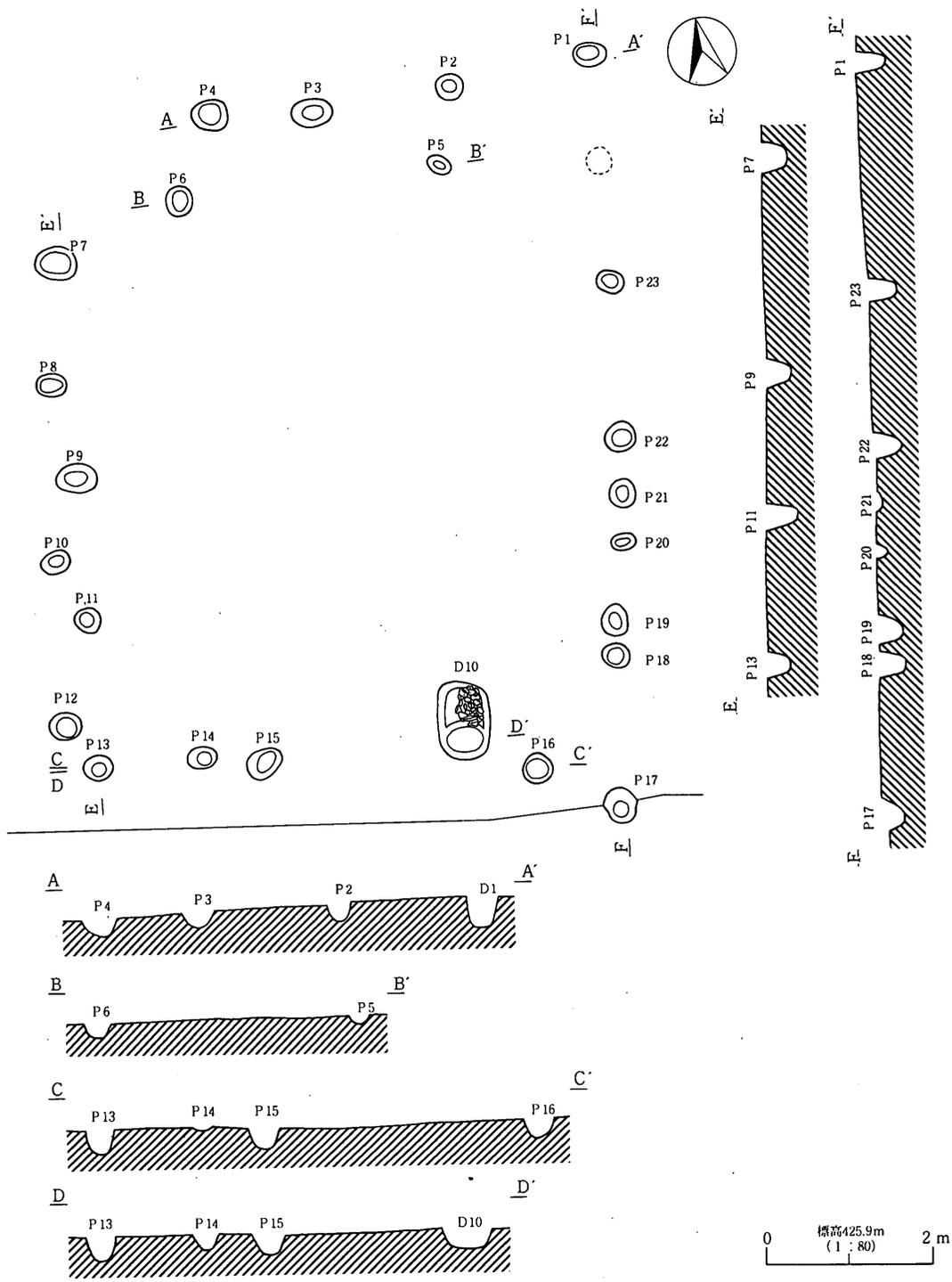
遺構(第13図)

検出位置 Yお5・6・7グリッドに位置し、調査区外に延びるものと思われるため建物址と考えた。**重複関係** 周辺のピットと新旧関係が考えられるが詳細は不明。**平面形態** 不明であるが、1間×3間以上の建物址と想定できる。柱間は約2m～2.2mを測る。主軸方位は、N-13°-Eを指すと思われる。**ピット** ピットの掘り方は、楕円形を呈している。P1は深さ36cm、P2は深さ28cm、P3は深さ36cm、P4は深さ28cmを測る。**覆土** 粘質土で、柱痕跡は検出されていない。**遺物** 出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物がないため不明である。



第13図 F1号掘立柱建物址実測図



第14图 F 2号掘立柱建物址夷测图

2) F 2号掘立柱建物址

遺構 (第14図)

検出位置 Xけ7・8・9、Xこ7・8・9グリッド。**重複関係** なし。**平面形態** 3間×4間の総柱式の支柱穴配置で、柱間間隔が不揃いで、柱筋のとおりが悪い状態。長軸約9.2m、短軸6.36mを測り矩形のプランを呈する。主軸方位は、N-15°-Eを指す。**ピット** ピットの掘り方は、楕円形を呈している。P 1は深さ41cm、P 2は深さ28cm、P 3は深さ16cm、P 4は深さ20cm、P 5は深さ8cm、P 6は深さ15cm、P 7は深さ24cm、P 8は深さ20cm、P 9は深さ25cm、P 10は深さ26cm、P 11は深さ36cm、P 12は深さ23cm、P 13は深さ26cm、P 14は深さ18cm、P 15は深さ20cm、P 16は深さ18cm、P 19は深さ28cm、P 20は深さ8cm、P 21は深さ6cm、P 22は深さ24cm、P 23は深さ32cmを測る。P 5・6は本建物址に伴うかどうか不明である。**覆土** 黒褐色の粘質土で、柱痕跡は検出されていない。**遺物** 出土しなかった。

時期 本建物址の所属時期は、出土遺物がないため不明であるが、ピットの規模が小さく、柱間間隔が不揃いであることから中世に所属する可能性も考えられる。

3 竪穴状遺構

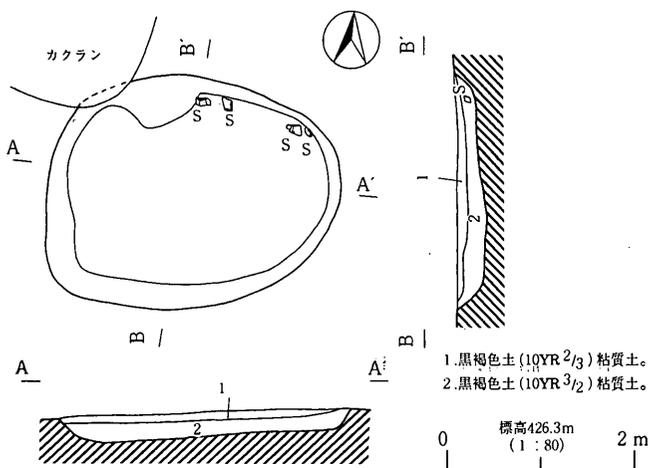
1) T a 1号竪穴状遺構

遺構 (第15図)

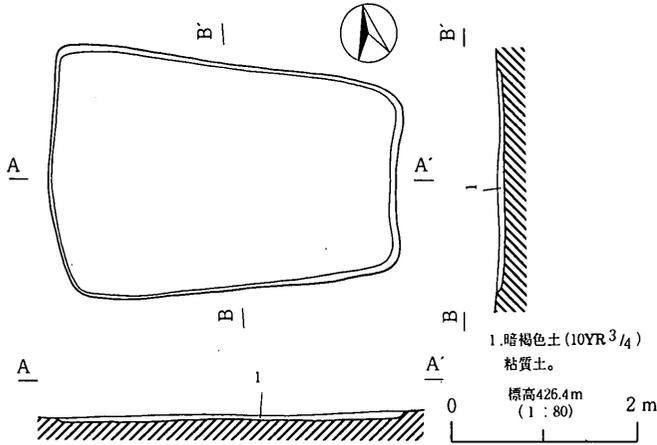
検出位置 Yく5・6、Yけ5・6グリッド。**重複関係** T a 3号竪穴状遺構を破壊する。**平面形態** 長軸3.7m、短軸2.38mの長楕円形を呈する。長軸方位N-79°-Wを指す。**覆土** 2層に分けられ、色調、性質はともに黒褐色の粘質土である。底面は、概ね平坦である。**遺物** 土師器甕、須恵器杯の小片のみ出土している。

分けられ、色調、性質はともに黒褐色の粘質土である。底面は、概ね平坦である。**遺物** 土師器甕、須恵器杯の小片のみ出土している。

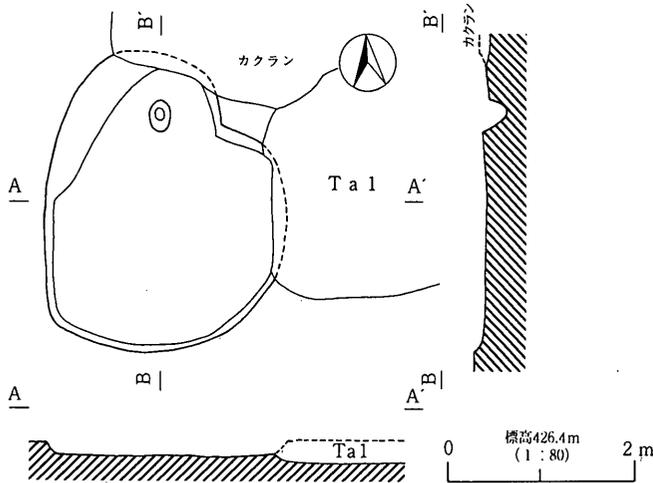
時期 出土遺物から本竪穴状遺構の所属時期は奈良～平安時代と思われる。



第15図 T a 1号竪穴状遺構



第16図 Ta2号竪穴状遺構実測図



第17図 Ta3号竪穴状遺構実測図

概ね平坦である。遺物 出土しなかった。時期 出土遺物がなく、本竪穴状遺構の所属時期は不明であるが、重複関係から奈良～平安時代以前と思われる。

2) Ta2号竪穴状遺構遺構 (第16図)

検出位置 Xか10グリッド。重複関係 H2号住居址を破壊する。平面形態 長軸3.12m、短軸2.45mの隅丸長方形を呈する。長軸方位N-80°-Eを指す。覆土 黒褐色の粘質土に被覆される。底面は、概ね平坦である。遺物 土師器甕が出土した。時期 出土遺物及び重複関係から平安時代末～中世と考えられようか。

3) Ta3号竪穴状遺構遺構 (第17図)

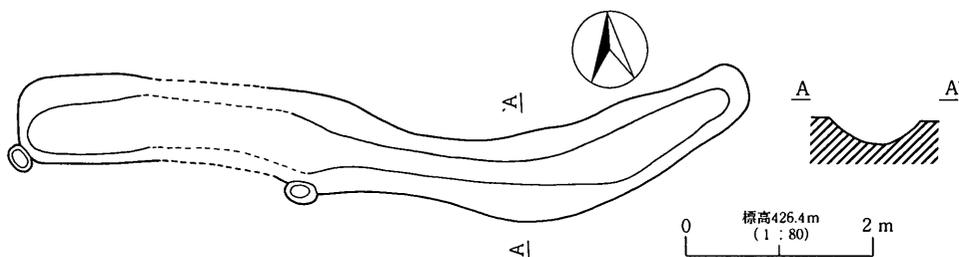
検出位置 Eけ5・6、Eこ5・6グリッド。重複関係 Ta1号竪穴状遺構に破壊される。平面形態 長軸3.12m、短軸2.56mの不整楕円形を呈する。長軸方位N-0°-Eを指す。覆土 暗褐色の粘質土に被覆される。底面は、

4 溝状遺構

1) M1号溝状遺構

遺構 (第18図)

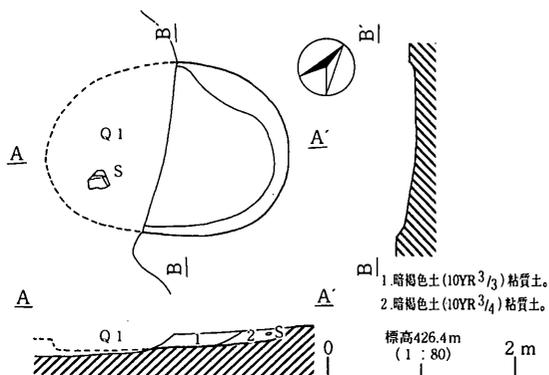
検出位置 Yか5、Yき5、Yく4・5グリッド。重複関係 なし。形状 検出長8m、幅56~106cm、深さ49cmを測る。粘質土を覆土に持つ。本址は、溝状遺構としたわけであるが、本遺構の性格及び所属時期は、不明な点が多い。



第18図 M1号溝状遺構実測図

5 土坑址

1) D1号土坑址



第19図 D1号土坑址実測図

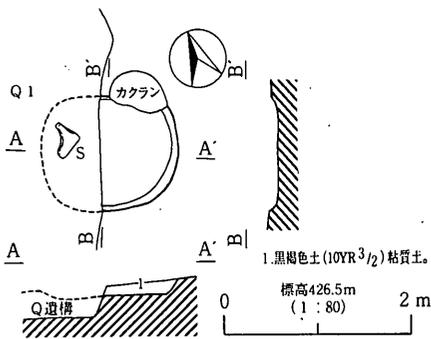
遺構 (第19図)

検出位置 Yき5・6、Yく5・6グリッド。重複関係 Q1号特殊遺構に破壊される。平面形態 長軸2.55m、短軸1.82mの楕円形を呈する。長軸方位は、N-53°-Eを指す。深さ20cmを測る。底面は概ね平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。時期 出土遺物がなく、重複関係から所属時期は奈良時代~平安時代以前といえる。

2) D2号土坑址

遺構 (第20図)

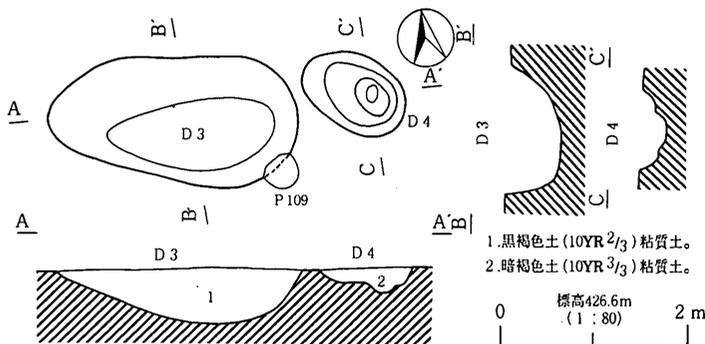
検出位置 Yき6グリッド。重複関係 Q1号特殊遺構を破壊される。平面形態 長軸1.46m、



第20図 D 2号土坑址実測図

短軸1.18mの楕円形を呈する。長軸方位は、N-67°-Wを指す。深さ19cmを測る。底面は概ね平坦である。時期 出土遺物がなく、重複関から平安時代以前の所属時期といえよう。

3) D 3号土坑址 遺構 (第21図)



第21図 D 3・4号土坑址実測図

検出位置 Yか3グリッド。

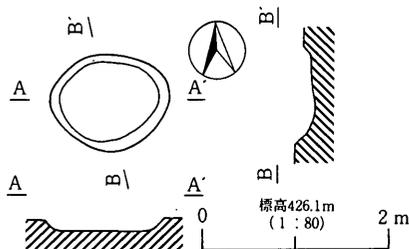
重複関係 P109に破壊される。平面形態 長軸2.64m、短軸1.24mの長楕円形を呈する。長軸方位は、N-82°-Wを指す。深さ52cmを測る。底面は概ね平坦である。

時期 出土遺物がなく、所属時期は不明である。

4) D 4号土坑址

遺構 (第21図)

検出位置 Yお3、Yか3グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.16m、短軸76cmの楕円形を呈する。長軸方位は、N-55°-Wを指す。深さ23cmを測る。底面は中央部が窪む形状を呈する。時期 出土遺物がなく所属時期は不明である。



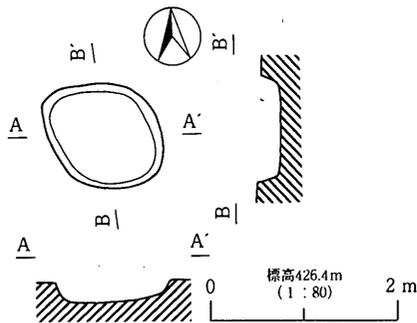
第22図 D 5号土坑址

5) D 5号土坑址

遺構 (第22図)

検出位置 Yこ5・6グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.28m、短軸1.04mの楕円形を呈する。長軸方位は、N-87°-Wを指す。深さ11cmを測る。底面は概ね平坦である。

時期 出土遺物がなく所属時期は不明である。



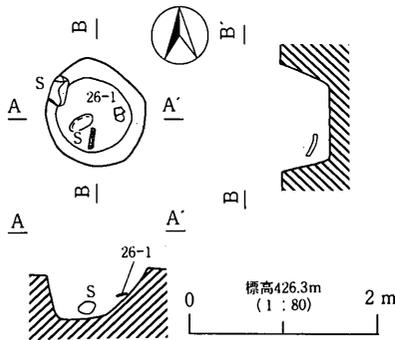
第23図 D 6号土坑址

6) D 6号土坑址

遺構 (第23図)

検出位置 Yき3グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.40m、短軸1.08mの楕円形を呈する。長軸方位は、N-57° - Eを指す。深さ18cmを測る。底面は概ね平坦である。

時期 出土遺物がなく所属時期は不明である。



第24図 D 7号土坑址

7) D 7号土坑址

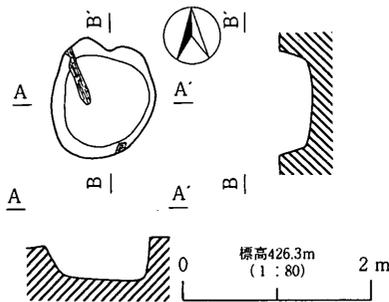
遺構 (第24図)

検出位置 Yき1グリッド。重複関係 H 2号住居址を破壊する。平面形態 長軸1.15m、短軸1.04mの楕円形を呈する。長軸方位は、N-17° - Wを指す。深さ57cmを測る。底面は概ね平坦である。覆土中から土師器甕・坏や羽釜が出土している。

遺物 (第26図-1)

本土坑址の出土遺物で図示できたのは1の羽釜のみである。

時期 出土遺物・重複関係から、平安時代後期に位置づけられる。



第25図 D 8号土坑址

8) D 8号土坑址

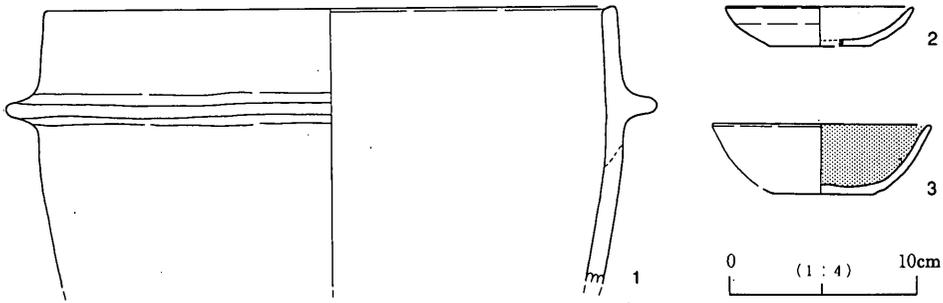
遺構 (第25図)

検出位置 Yき10グリッド。重複関係 H 2号住居址を破壊する。平面形態 長軸1.27m、短軸1.08mの楕円形を呈する。長軸方位は、N-35° - Eを指す。深さ35.5cmを測る。底面は概ね平坦である。覆土中から土師器甕・坏等が出土している。

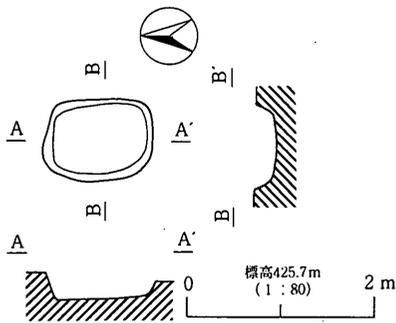
遺物 (第26図-2・3)

本土坑址の出土遺物で図示できたのは2点である。3は内面黒色処理の施された土師器坏である。2は土師器坏で、器高が低いものである。

時期 出土遺物・重複関係から平安時代後期に位置づけられる。



第26図 D7・8号土坑址出土土器実測図



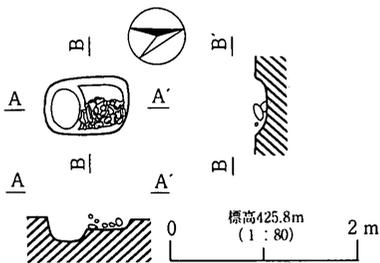
第27図 D9号土坑址

9) D9号土坑址

遺構 (第27図)

検出位置 Xこ10グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.16m、短軸86cmの方形を呈する。長軸方位は、N-2°-Wを指す。深さ24cmを測る。底面は概ね平坦である。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期は不明である。



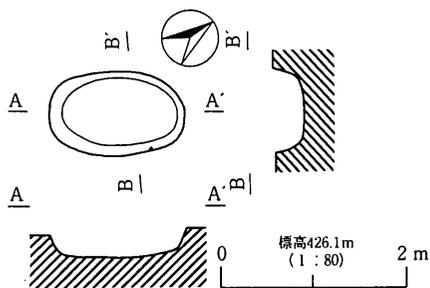
第28図 D10号土坑址

10) D10号土坑址

遺構 (第28図)

検出位置 Xけ9グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸88cm、短軸60cmの方形を呈する。長軸方位は、N-13°-Eを指す。深さ30cmを測る。底面は概ね平坦であるが北側にテラスを有する。テラス

の上には礫が集中していた。時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期は不明である。



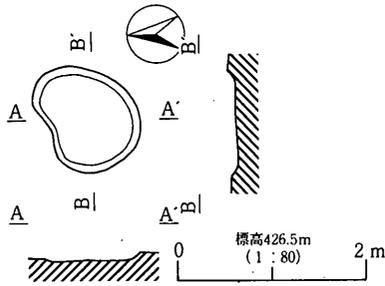
第29図 D11号土坑址

11) D11号土坑址

遺構 (第29図)

検出位置 Xき10、Yき1グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸1.44m、短軸88cmの楕円形を呈する。長軸方位は、N-32°-Eを指す。深さ41cmを測る。底面は概ね平坦である。

時期 出土遺物がなく所属時期は不明である。



第30図 D12号土坑址

12) D12号土坑址

遺構 (第30図)

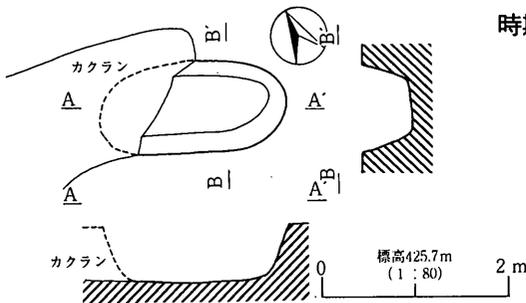
検出位置 Xお8・9グリッド。重複関係 なし。

平面形態 長軸1.22m、短軸100cmの不整形を呈する。

長軸方位は、N-32°-Eを指す。深さ7cmを測る。

底面は概ね平坦である。検出面および覆土中から土師器甕、須恵器甕の出土があった。

時期 出土遺物より、平安時代に位置づけられる。



第31図 D13号土坑址

13) D13号土坑址

遺構 (第31図)

検出位置 Eあ1グリッド。重複関係 西側が攪乱されている。平面形態 長軸1.96m?、短軸96cmの長楕円形を呈する。長軸方位は、N-

71°-Wを指すものと思われる。深さ51cmを測る。底面は概ね平坦である。

時期 出土遺物がなく本土坑址の所属時期は不明である。

6 特殊遺構

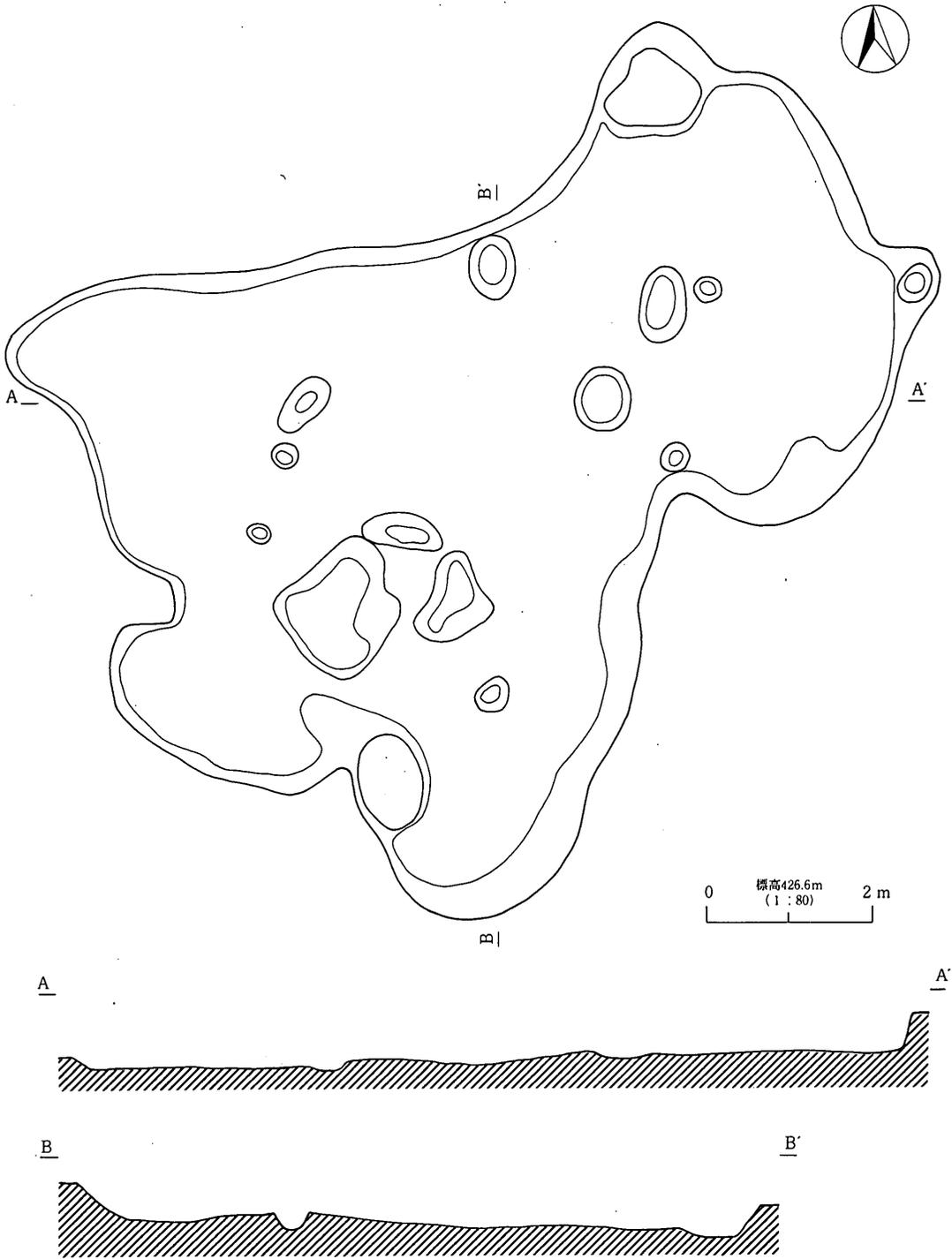
1) Q1号特殊遺構

遺構 (第32図)

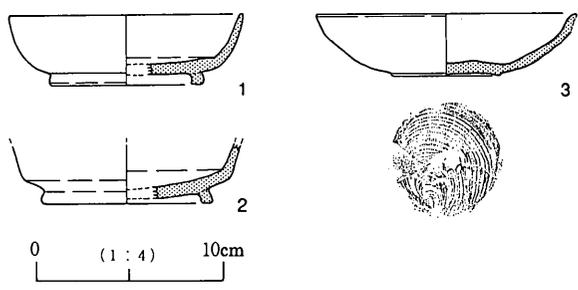
検出位置 Yき6・7、Yく5・6・7・8、Yけ6・7・8、Yこ6・7グリッド。重複関係 D1・2号土坑址を破壊する。平面形態 長軸10.80mの不整形を呈する。深さ34cmを測る。底面は概ね平坦に近いが、凹凸状を呈し、部分的にはピット状を呈するところもある。本遺構は、当初住居址等の遺構を想定して、遺構のプラン検出に努めたが、覆土に明確な相違が見られず遺物は出土するが、大型の落ち込みとしか認識できなかったため、特殊遺構とした。底部には、硬化面はなく軟質な底面であった。本遺構の性格は、不明である。遺物 覆土中から土師器甕・坏、須恵器坏・甕が出土しているが、量的には多くない。

遺物 (第33図)

本遺構で図示できた遺物は3点である。1・2共に須恵器の高台付坏で、箱型を呈する器形である。底部には、回転ヘラ切り痕が未処理のまま残っている。3は須恵器坏で、底部に回転糸切



第32图 Q1号特殊遺構実測図



第33図 Q 1号特殊遺構出土土器実測図

り痕が未処理である。

時期 本遺構の所属時期は出土遺物から奈良時代後半～平安時代後半に所属するものと思われる。

7 その他

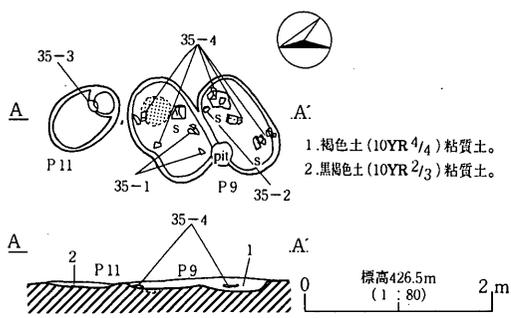
1) ピット

遺構 (第34図)

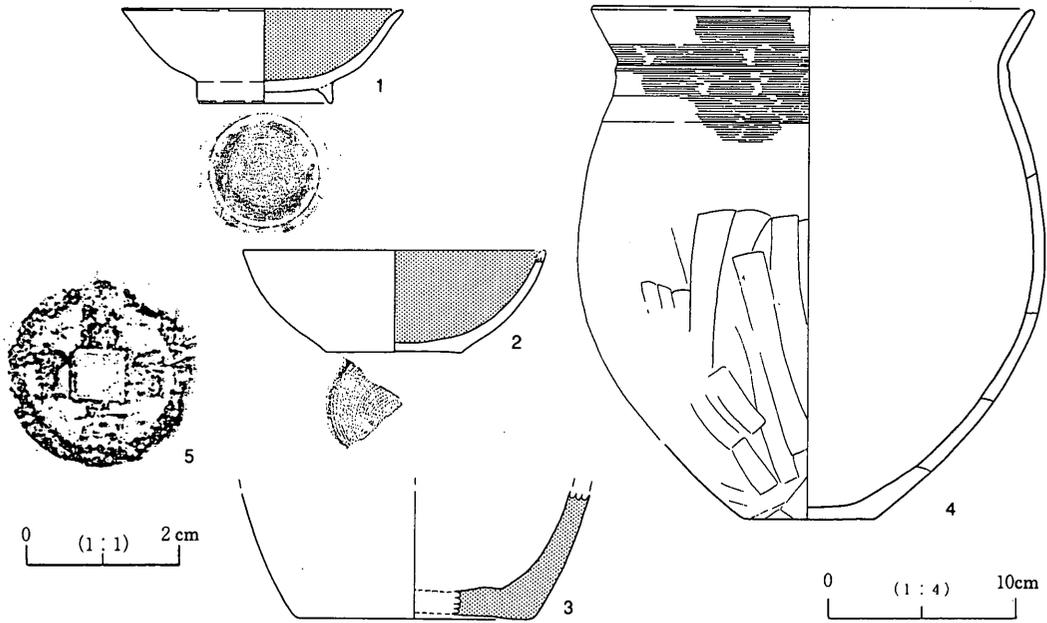
本遺跡からは、多数のピットが検出されているが規格、形状等が統一されているようなものが少なく、性格は不明なものが多い。その中で、P 9・11を図示した。検出位置は、調査区の東側中央付近のYお2・3グリッドである。P 9は、2基のピットの重複関係の認められるような形態を呈しているが、覆土に明確な差異は認められなかったため、1基とした。P.12に一部破壊されている。覆土は、褐色の粘質土に覆われ、北側の底面には焼土址が認められた。P 11は、東側にテラスを有する浅いピットで、形態は楕円形を呈する。2基のピットをここでは、ピットとして取り扱うわけであるが、H 2号竪穴住居址が耕作により床面付近まで破壊されている状況、底面に焼土址が認められる事等から、竪穴住居址の可能性が考えられる。P 9が住居址のカマドにあたり、P 11が住居址内のピットで、床面までが破壊されている状況とも想定できる。

遺物 (第35図)

P 9の出土遺物では、1の内面黒色処理の施される土師器碗、2は内面黒色処理の施される土師器坏、4は頸部くの字型の土師器甕で、胴部上半にはロクロヨコナデ、胴部下半には縦方向のヘラケズリが施される。P 11から出土した土器は、3の須恵器の甕の底部で、外面に叩き目がある。



第34図 P 9・P 11実測図



第35図 ピット・グリッド出土遺物 実測図

2) その他の遺物 遺物 (第35図)

5は北宋銭である。Yか2グリッドからの出土で、篆書体の紹聖元寶(1094年鑄造)である。

第5節 総括

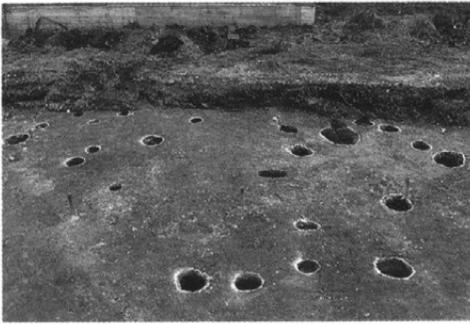
町横尾遺跡は、今回の調査によって、古代の集落址である事が判明した。この集落址は密度の濃いものではないが、調査区内に検出された2棟の竪穴住居址以外に、もう1棟の住居址の存在を示唆できることは、先に触れた。これらの住居址の所属時期は、坂城町内に類例が少ない平安時代に位置づけられ、今後の坂城町の古代の集落址構造を考える上での貴重な資料となろう。出土した遺物の中には平安時代以前の遺物が少ない事を考え合わせると、同遺跡内は平安時代以降に集落址となった事が考えられる。また、掘立柱建物址の形態的な特徴からは、古代というよりも中世的な様相が認められるため、本遺跡は中世までの時期を与える事ができると思われる。このことは、調査区から距離で約200mのところに位置している中世末に位置づけられると思われる観音坂城跡の存在と本遺跡の関係が問題となってくるように考えられる。しかし、今回の発掘調査の結果では、調査の地点的なこと、面積的なことより解明することはできなかった。今後の課題である。遺跡周辺が現在も城坂(しろさか)と呼称されていることは、当時城があったことに起因することに違いないわけであるが、観音坂城跡に関する文献資料も少なく、今後の資料の蓄積を待たねばならないと言えよう。



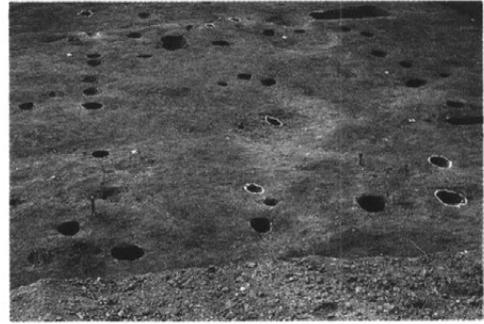
H1号住居址 西より



H2号住居址 西より



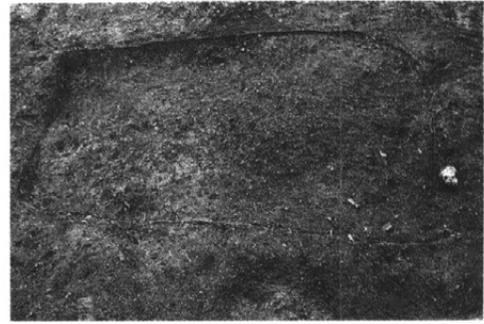
F1号掘立柱建物址 西より



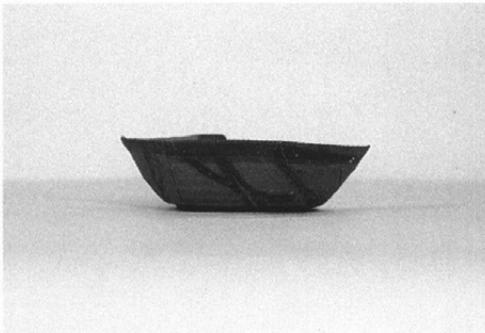
F2号掘立柱建物址 北より



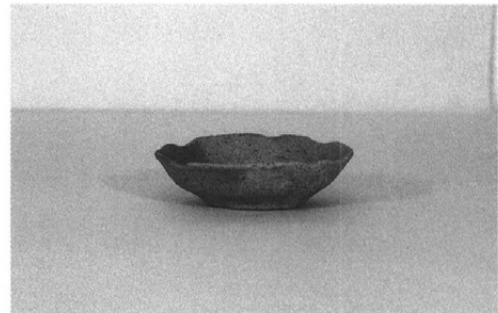
Ta1号 竪穴状遺構 南より



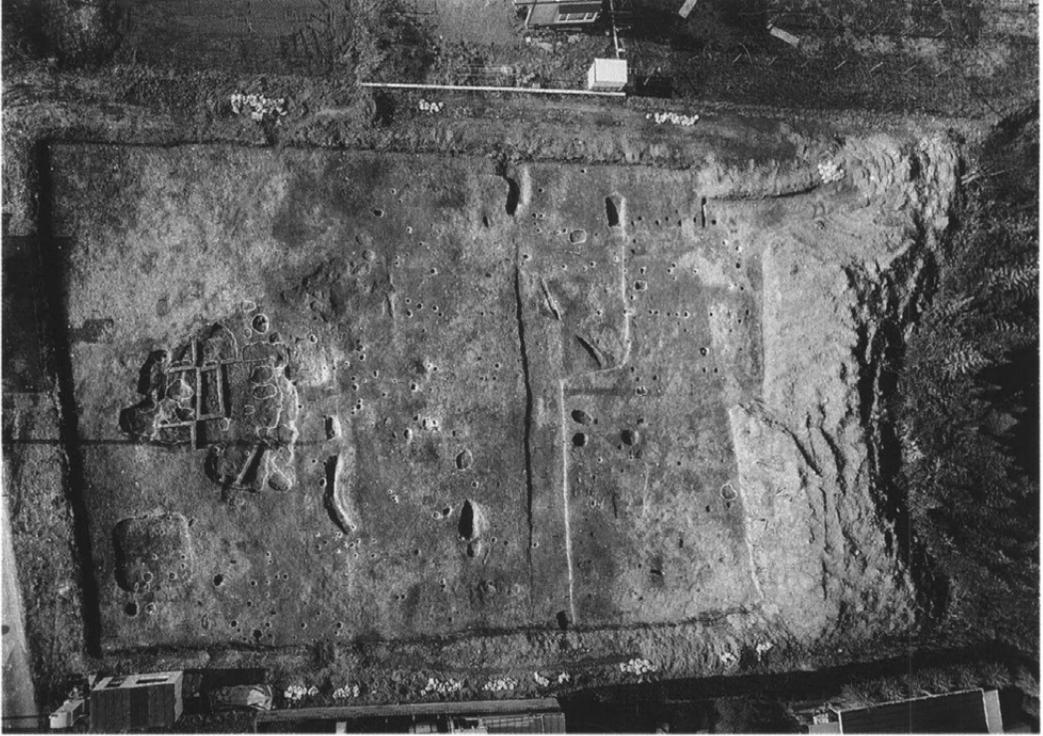
Ta2号 竪穴状遺構 南より



H1号住 8-1



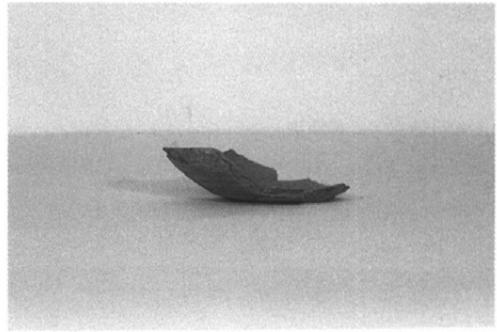
H2号住 11-7



町横尾遺跡航空写真



P9 35-1



Q1号特殊遺構 33-3



P9 35-4

あとがき

ここに、戌久保遺跡と町横尾遺跡の発掘調査報告書を上梓するのはこびになった。両遺跡とも周知の遺跡地に坂城町土地開発公社が行う宅地造成の計画が持ち上がり、関係者で何とか保存できないかと保護協議がなされたが、どうしても破壊が避けられない見込みであるため、造成工事に先立って記録保存を前提とする緊急発掘調査が実施されることになった。

千曲川によって東西に分断される坂城町の町域のうち、東側の南条・中之条・坂城地区は、町域の南東端から北東端にわたり連なる太郎山・大峯山・大道山・鳩ヶ峯・鏡台山の1100～1300mの山々から流れだし、千曲川に合流する谷川・御堂川・名沢川・日名沢川が形成した扇状地が複合したゆるやかな傾斜地形をなしているのが特徴である。今回調査された戌久保遺跡は名沢川扇状地の、町横尾遺跡は谷川扇状地の、ともに扇央部で標高400m台前半あたりに位置している。千曲川の東側においては、千曲川沿いのさして広くない沖積地の開発とともに、この扇状地面の開発が是非とも必要であったが、いくつもの古墳の存在から、それは古墳時代には始まっていたと考えられていた。

戌久保遺跡は北側に展開が予測される遺跡の縁辺部と思われるが、とくに古墳時代後期の遺物が出土したことは重要である。また、町横尾遺跡は平安時代から中世にわたる集落遺跡であり、調査面積の関係で一部分の解明にすぎないものの、あまり知られていなかったこの扇状地面における古代集落の様相をうかがい知る手掛かりを提示できたことは大きな成果であると言える。

村上氏が、村上地区を本拠とする国人領主からこの坂城地区に本拠を移し東北信を代表する戦国大名に成長したのも、古墳時代以来、とりわけ平安時代以来のこの扇状地面の開発の進展があったればこそと考えられる。その点でも、両遺跡の発掘調査の結果により示唆されることは、坂城町の歴史にとって看過できない重要なことである。

戌久保遺跡の発掘調査は、団長に千曲川水系古代文化研究所主幹の森嶋稔先生をお願いして行われたが、その森嶋先生が報告書の発行をみることなく、平成8年6月に不慮の事故により急逝されてしまった。また、平成9年7月に発掘調査現場で発生した事故に遭った学芸員の小平光一君が8月に亡くなるという悲しい出来事があった。しかし、発掘調査も整理作業も一日たりとも休むことなく当初の計画通りに遂行しなければならない。学芸員を一人欠くという厳しい体制の中で、調査担当者によく協力し作業に当たって下さった作業員の皆さん、そして、現場から報告書作成にいたるまで種々ご指導ご教示いただいた皆さんに、一々お名前は申し上げないが、心からお礼を申し上げ、あとがきとさせていただきます。(塩入 秀敏)

報告書抄録

ふりがな	いぬくほいせき・まちよこおいせき							
書名	戌久保遺跡・町横尾遺跡							
副書名	長野県埴科郡坂城町宅地造成事業に係る緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
著者名	塩入秀敏・助川朋広							
編集機関	坂城町教育委員会							
所在地	〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 TEL 0268-82-2069							
発行年月日	1998年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いぬくほいせき 戌久保遺跡	はにしなぐんさかきまち 埴科郡坂城町 おおあぎさかき 大字坂城8948 -1 他	1521		36° 27' 00"	138° 11' 57"	現地調査 1992年 1月8日～ 1月22日	126	宅地造成 事業
まちよこおいせき 町横尾遺跡	はにしなぐんさかきまち 埴科郡坂城町 おおあぎみなまじょう 大字南条 4782 他	1521		36° 26' 23"	138° 11' 48"	現地調査 1996年 11月22日～ 12月17日	1391	宅地造成 事業
収録遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
戌久保遺跡	集落 址	平安時代	土坑址 2基 等		土師器・須恵器		集落址内の密度の薄い 地区の調査。	
町横尾遺跡	集落 址	平安時代	竪穴住居址 2棟 掘立柱建物址 2棟 土坑址 13基 等		土師器・須恵器		調査前は散布地であっ たが、調査によって住 居址等が検出された。	

坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書

	『開畝製鉄遺跡－第1次調査報告書』	1977
	『開畝製鉄遺跡－第2次調査報告書』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群 宮上遺跡II』（概報）	1993
	『南条遺跡群 塚田遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群 東裏遺跡II・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群 塚田遺跡II』	1995
第5集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群 寺浦遺跡II』	1996
第7集	『中之条遺跡群 上町遺跡II』	1996
第8集	『上五明条里水田址』	1996
第9集	『町内遺跡発掘調査報告書 1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書 1996』	1997
第12集	『戌久保遺跡・町横尾遺跡』	1998

発行日 1998年3月27日

編集者 坂城町教育委員会

発行者 坂城町教育委員会

〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2,468番地

TEL 0268(82)2069

印刷者 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野市西和田470

TEL 026(243)2105
